

大学教育開発研究シリーズ
NO.27 ● Oct. 2018

動画で深める学び

—教材から授業を変える—

立教大学
大学教育開発・支援センター

ISSN 1881-1035

はじめに

この冊子は、2018年7月10日に開催されたシンポジウム「動画で深める学び—教材から授業を変える—」の記録です。

大学教育開発・支援センターでは、ほぼ毎年シンポジウムを開催しています。シンポジウムを準備するにあたっては、どういう趣旨・ねらいをもった企画にするかを考えなければなりません。今回は、第1回立教大学教育活動特別賞の受賞者の先生方の中からお話を伺おうと思い、まず受賞者の先生方にアンケートをさせていただきました（このアンケートの内容・結果につきましては、同センターのニュースレターであるMOVE22号や同センターのHP上でその一部を公表しています）。いただいた回答を見ると、実にさまざまな分野の先生方が動画を用いながら教材の工夫をなさっていました。そこで、動画を用いて学生自らが考えて学びを深めるにはどのような手法があるのか、という趣旨でシンポジウムを行おうと考えるに至りました。

そのような趣旨でシンポジウムを行うにあたり、今回ご登壇いただいたのが次の3名の先生方です。

平山孝人先生（理学部教授）は、「物理計測論」という科目で、動画を用いた反転授業を実践されています。学生は、事前に先生が作成された動画を見て予習を行い、授業時間中は動画で学んだ内容を定着させるために演習問題を解きながら、学生間、先生と学生の間で意見交換を行います。このような方式で反転授業を行うには、どのソフトを用いて動画を収録するか、動画の長さとしてどのぐらいのものがいいのかなど、さまざまなことを考慮しなければなりません。そういった試行錯誤の過程も含めて平山先生にお話しいただきました。

金子祥之先生（社会学部兼任講師）は、「環境と文化」という科目で、ドキュメンタリー映像を活用されています。「いま・ここ」に生きている学生からすると、授業の内容は「ここ」ではない「あそこ」の問題や、「いま」ではない「あとき」の問題を扱うことがしばしばあります。その際に、学生と対象との間に距離があるわけです。金子先生は、その距離がもたらす取っ付きにくさを解消するための1つの手段としてドキュメンタリー映像を活用されています。そのような動画の活用法の意義について、金子先生にお話しいただきました。

棕棒哲也先生（文学部兼任講師）は、「文学講義 331（近現代日本文学1）」という科目で、さまざまな文学作品の舞台探訪の動画を活用されています。舞台探訪とは、物語の行間、背景、実態を探るために、舞台を訪ね歩くことを意味しています。たとえば、志賀直哉『城の崎にて』を紹介する際には、先生自らが城崎まで足を運び、舞台となった場面を訪ね歩く様子を動画に収録し、それを学生に鑑賞させています。このような舞台探訪の意義について、棕棒先生にお話しいただきました。

3名の先生方大変充実したご報告のおかげでとても密度の濃い、内容のあるシンポジウムにすることができました。改めて平山先生、金子先生、棕棒先生に心より御礼申し上げます。そして、当日はとて多くの方に参加いただき、活発な質疑応答がなされました。参加者の皆様にも御礼申し上げます。

この冊子が読者の皆様にとって有益なヒントを含む1冊となることを願っております。

大学教育開発・支援センター センター員、法学部教授

幡野 弘樹

はじめに 幡野 弘樹 氏	2
プログラム	9
開会挨拶・趣旨説明 栗田 和好 氏	11

第1部：事例報告1

誰でもできる反転授業	17
-------------------------	----

科目名：物理計測論

平山 孝人 氏

はじめに	17
1. 「物理計測論」という科目	18
2. 反転授業の自分なりの大原則とやり方を決める	21
3. 反転授業をやり始める	25
4. 反転授業の効果	28
さいごに	29
【スライド①】	30

第2部：事例報告2

「環境と文化」におけるドキュメンタリー映像の活用	43
---------------------------------------	----

科目名：環境と文化

金子 祥之 氏

はじめに	43
1. 「環境と文化」という科目	44
2. 欠点を長所に変える	46
3. ドキュメンタリー映像を見る	48
4. なぜドキュメンタリーか	53
さいごに	55
【資料】	57
【スライド②】	58

第3部：事例報告3

舞台探訪の動画は文学講義に資するか
—志賀直哉「城の崎にて」鑑賞を中心に— 71
科目名：文学講義331（近現代日本文学1）

棕棒 哲也 氏

はじめに 71
1. 「文学講義331（近現代日本文学1）」という科目 72
2. 舞台探訪までの試行過程 73
3. 各回における作品の取り上げ方の工夫 75
4. 動画で舞台探訪する 79
さいごに 80
【地図】 81
【スライド③】 82

質疑応答・ディスカッション 87
閉会挨拶 高林 陽展 氏 104

動画で深める学び

—教材から授業を変える—

2018年7月10日（火）開催
シンポジウムの記録

プログラム

動画で深める学び

—教材から授業を変える—

開会挨拶 栗田 和好 氏
(大学教育開発・支援センター センター長、理学部教授)

第1部：事例報告1

誰でもできる反転授業
平山 孝人 氏 (理学部教授)

科目名：物理計測論

第2部：事例報告2

「環境と文化」におけるドキュメンタリー映像の活用
金子 祥之 氏 (社会学部兼任講師)

科目名：環境と文化

第3部：事例報告3

舞台探訪の動画は文学講義に資するか
—志賀直哉「城の崎にて」鑑賞を中心に—
棕棒 哲也 氏 (文学部兼任講師)

科目名：文学講義331 (近現代日本文学1)

質疑応答・ディスカッション

閉会挨拶 高林 陽展 氏 (大学教育開発・支援センター センター員、文学部准教授)

司 会 幡野 弘樹 氏 (大学教育開発・支援センター センター員、法学部教授)

日 時 2018年7月10日 (火) 18:30~20:30

場 所 池袋キャンパス 太刀川記念館3階 カンファレンス・ルーム

動画で深める学び

—教材から授業を変える—

司会

大学教育開発・支援センター センター員、法学部 教授

幡野 弘樹 氏



○**司会** 皆さん、こんばんは。本日はお忙しいところ、「動画で深める学び—教材から授業を変える—」というシンポジウムにお越しいただきまして、ありがとうございます。私は大学教育開発・支援センターのセンター員をしております法学部の幡野と申します。本日は司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは初めに、当センターの栗田センター長より開会のご挨拶をお願いいたします。

開会挨拶

○**栗田** ただ今ご紹介いただきました大学教育開発・支援センターのセンター長、理学部の栗田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日はお暑期中、またお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。実は私はセンター長に着任したのが今年度の4月で、まだ新米ですが、私なりに大学教育の価値とはどういうものかを考えております。いまだにさまざまな文献を読んだり、さまざまな方にお話を伺ったりして考えている最中ではありますが、現在私が捉えている価値というのは、この表題にもあります、学びを深めるということです。

現在の学生がインターネットで大量の情報をサーフィンするような時代において、深く学んでいく、調べていくような、そういう学びの価値、意義、また楽しみをどのように伝えていくのが、今われわれ大学の教員として問われているこ

とかと思うわけです。

そういうことを伝えることによって、学生がこの多くの課題がある社会に出ていくときに励ましとなるような知恵、ある意味で人生の武器を身に付けて出ていくことを願っているわけです。今回のシンポジウムの目的は、偶然にもその深い学びを伝えることがテーマでして、動画を切り口にして、さまざまな分野から、学生にその重要さや楽しさを伝える試みをお話しいただく機会になりました。皆さんにとっても、そこからさまざまなヒントやアイデアを思い付いて、交流できる機会になればと思っています。

登壇者の3名は、昨年度、立教大学で初めての教育活動特別賞を受賞された方々です。この賞は端的に申しますと、教育でグッドプラクティスをされている方を、主に授業評価アンケートの結果などを参考に各組織からご推薦いただいて顕彰するものです。

理学部の平山先生、社会学部の金子先生、文学部の棕棒先生というお三方にお話しいたします。当センターから依頼したお話の内容は、授業概要、授業の工夫と、その途上で失敗も含めて試行錯誤されていることです。お手元の資料に、このお三方の担当されている授業のシラバスが入っておりますので、お話をお聞きになっている最中に、ご参考にしていただければと思います。皆さんにとっても、実践例として、アイデアや工夫のヒントになることがあるかと考えられますので、有意義な会になればいいなと思っています。

それから、シンポジウムの最後にディスカッションの時間も設けております。分野を超えた交流で活発な意見の交換ができればと思っていますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

私からの挨拶は以上です。どうも



大学教育開発・支援センター センター長、理学部

栗田 和好 氏

ありがとうございました。

○司会 栗田先生、どうもありがとうございました。初めに、全体の流れを説明させていただきます。本日は、まず3名の先生に授業実践に関する事例報告をしていただきます。その後に、質疑応答あるいはディスカッションをいたします。多くのご質問をお願いできればと思っております。

第 1 部



誰でもできる反転授業

理学部 教授
平山 孝人 氏

○司会 それでは、初めに平山孝人先生からお話を頂きたいと思います。平山先生は、本学理学部物理学科の教授でいらっしゃいます。先ほど栗田先生からもご紹介がありましたとおり、本日まで報告いただく3名の先生方は、いずれも第1回立教大学教育活動特別賞を受賞されていますが、平山先生の受賞科目は「物理計測論」という科目です。本日は、「誰でもできる反転授業」というタイトルでご報告を頂きます。それでは平山先生、どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに

○平山 ご紹介ありがとうございます。理学部の平山です。本日は「誰でもできる反転授業」というタイトルでお話をします。最初に登壇依頼を受けたときに、「誰でもできる」とタイトルにつけましたが、結果的にはそうではなかったかなと思いながら「誰でもできる反転授業」という内容をご紹介したいと思います。本日の話の流れは次の通りです。まず私が担当した「物理計測論」という科目がどのような科目か。それから、ご存知の方も多いと思いますが、反転授業とはいったいどのようなものなのか。それから私の場合の反転授業のやり方についてのご紹介。また、反転授業にしたことによって、どのような効果があったかという、私なりの感想も半分入りますが、効果についての話。そして、最後に時間があれば実演をしようと思うのですが、たぶん時間はないと思います。そのため最初に、具体的に私がどのような感じの動画を作っているのかをお見せします。【スライド①-1】

〔「学生に公開している動画」のスライドを指し〕この青いフレームの中が、実際に学生が見ている動画です。私が今使っているようなスライドを映して、それを収録したものをこれから少し動かします。この動画には私の声も本来は入っているのですが、今は実は私のMacintosh（マッキントッシュ、以下Macと表記）の調子が悪くて音声が出ないのですが、見ていただきたいのは、〔スライドの青いフレーム内を指し〕今ここにカーソルがあります。これは私が収録したときのMacの画面上のカーソルです。

動画にすると、どうしてもレーザーポインターが使えないので、「ここが」と言うときに、なかなか難しいのですね。このMacの画面上に出てくるカーソルを同時に録画することで、消えたりついたりしない点で少し難しいところはありませんが、基本は「ここが」ということが言えるのと、後でアニメーションが少しだけ出てきますが、アニメーションも普通に出す分には全然問題なく出ます。その例を少しお見せします。

〔動画再生開始〕

これでカーソルが、…今あまり動かないですね。これでクルクル回って、今「この点が」と言っているところです。そのうち、ここにボンとアニメーションで何か出てくるという感じの、いわゆる普通に私が授業をしているときのアニメーションのレベル、それからカーソルの動かし方であれば、十分に追隨するレベルの動画が作れて、それを学生が見て、事前に予習をするというやり方です。ここ（<http://s.rikkyo.ac.jp/VideoSample>）に実際に学生に公開している動画を例として載せてありますので、興味をお持ちの方はご覧ください。【スライド①-2】

〔動画再生終了〕

1. 「物理計測論」という科目

私が担当した講義の「物理計測論」はどのような講義かというと、私が所属している物理学科の専門選択科目です。本日お配りしているシラバスにも書いてありますが、期末試験を6割、それから授業中の小テストを4割で配点しています。

履修者数は、年によって多少は変わりますが、90人から100人ぐらいです。

1年生がだいたい7割ぐらいで、2年生以上が3割ぐらい。選択科目にしては珍しいのですが、1年生で落として、2年生でもう1回取るという学生も、そこそこいます。出席率は、小テストを毎回やりますので比較的高く、8割から9割ぐらいが毎回出席しています。

内容は、いわゆる誤差論という分野なのですが、物理の世界というのは、基本的に実験で数字を測定する、測定結果は数字ということが多いので、その数の取り扱い方をどうするかを実際に勉強しましょう、という科目です。学生は、学生実験の中でのデータ処理は、ほとんどの場合は表計算ソフト、Excelで今はやってしまいます。

私はいつも学生にも言うし、さまざま危惧していることがあります。それは、Excelが何をやっているのかを全く理解しないで、ポチッとやると結果が出ることです。それがあまり後々のためにはよろしくないので、Excelの中では実際に何をやっているのかをきちんと理解してほしい。そのため、この講義の中ではExcelは一切使わず、当然ですが試験はPCの持ち込みができないので、全て手計算と電卓でやるという講義です。したがって、授業を聴いて分かったつもりになっただけでは何の役にも立たない講義です。**【スライド①-3】**

私はこれを2014年まで4～5年やっていました。やり方としては、PCを使って、今みたいにスライドを画面に映して、レーザーポインターで指しながら、ペ



ラペラしゃべるという普通の講義をやっていました。授業時間中に、やはり手を動かすことを強制したかったので、15分から20分ぐらいの小テストをやりました。前回の授業の内容の小テストを次回でやる、だから「復習をきちんとしてこない小テストは解けないよ」というやり方でやっていました。

14回の講義中、10回程度の小テストをやるというやり方で4～5年やっていましたが、授業評価アンケートでは、演習問題をもっとやってほしいという学生の声が多かったです。やはり問題を解くことが大事だということは一部の学生にはきちんと伝わるので、しかし、小テストぐらいしか実際に問題を解く時間がない、もっと出してほしいという学生が、それなりにいました。

あと、これは私の授業のやり方の問題もかなりあると思いますが、授業時間中には質問はほぼありませんでした。全くと言っていいぐらいない。授業の後にほんの少し来るぐらいはありましたが、基本ない。だから、学生にとってみると、私がスライドを使って、こうやってしゃべっていることを、ただ聴くだけの授業でした。すると、結局学生にとっては、授業はいわゆるYouTubeで動画を見ているのと同じなのではないかと思い始め、その当時少し耳に入ってきていた反転授業というやり方ができるのではないかと思います。

それで、物理学科の教員、例えば大学教育開発・支援センターのセンター長の栗田先生もそうですが、反転授業にトライされた方が何人かいて、そういう方に



経験談を聞いたりもしました。経験者から言われたことは、「やり方次第」ということでした。うまくいくとは限らない。なんとなくうまくいきそうだなとは思って甘く見ていましたが、うまくいくとは限らない。けれども、12月か1月ぐらいですかね、どうしようかなと悩んでいたのですが、少しリラックスした状態でシラバスを書いていたら、反転授業でやると書いてしまいましたので、これはもうやらざるを得なくなりました。それで、2015年度から反転授業をやりました。

【スライド①-4】

2. 反転授業の自分なりの大原則とやり方を決める

反転授業は皆さんご存知だとは思いますが、普通の授業形式が、私が前にやっていたような、講義をしてレポートとか宿題を出して、授業の後に学生が家に帰って課題をして復習をするものだとすると、それを逆転させて、事前に授業内容をインプットさせておいて、授業時間中には何か今まで宿題でやっていたようなことをやろうということが、一般的な反転授業の定義ではないかと思います。私は事前に動画をアップして、学生はそれを授業前に見て、予習をして、授業時間中には問題を解くだけにしようと決めました。**【スライド①-5】**

やるということは決めたのですが、具体的なやり方は白紙の状態だったので、大原則として、この3つは最初に決めました。まずは、やはり簡単な方法でやらないと、たぶん自分があっぴあっぴしてしまうので、なるべく簡単な方法でやろう。

それから、確か2014年度、「物理計測論」で反転授業をやる前の年に、14回分の大学院の授業を全て、メディアセンターの方に動画に収録してもらって、それをiTunes Uに載せるという経験をしました。そのときは、動画の画面上、スライドのデータの横に私が映っています。だからスライドのデータと私の姿が常に動画に映っていて、やはりあのような動画というのは、それなりに恥ずかしいのですね。私の動きが何らかの情報を持っているわけではないので、学生にそれを見せる必要もない。

それからもう1つは、自分の姿を写すためにはビデオカメラが必要で、それを用意して、ビデオカメラと一緒にスライドデータをまとめたファイルを作ること、たぶん私だけではできないこともあって、もう音だけにしようと決めました。

だから、スライドと音だけ。さっきお見せした、あれが全てです。スライドのデータしか目に入らない。耳から、私のしゃべっている声だけが聞こえるやり方にしよう。

それから、今考えると、これが一番大事だったと思いますが、完璧を目指さない。これは1番目のできるだけ簡単な方法という点と重なるところもありますが、完璧を目指すとなかなかつらいのですね。収録をしていると、途中でくしゃみをしたりしますが、それをとりあえず無視します。それも入った動画を学生に見せる。そのレベルはもう完全に無視しよう。言い間違いに途中で気付いたら言い直しをする。それも許す。だから1つの動画を見たときに、完璧な番組にはなっていません。放送大学みたいな完璧な番組には全然ならない。それを良しとしようとして最初に決めました。そうしておかないと非常に大変だろうということは事前に予想がついたので、結果的にそれは非常によかったです。

2015年の1月、2月、3月に準備を始めたわけですが、まず、どのように動画の収録をしようかという点と、それから、作った動画のファイルをどうやって学生に見せようか、どこに置こうか、それから、動画を作って事前にアップして、授業時間内に何をやるかという点を、事前に検討しました。それについて、これから一つ一つご説明いたします。【スライド①-6】

まずは収録をどのようにやるかですが、メディアサイトというシステムが立教



大学にはあり、これが一番お勧めです。授業の収録に適した、映像の収録と編集と配信までできるシステムです。ハードウェアも含めたシステムがあります。例えば、キャリアセンターのガイダンスなどはだいたいそれで撮っていて、後から出席できなかった学生に見せるなどの用途に使ったり、その他ライブ配信も行ったりしています。

教室のAV機器にメディアサイトが連動するよう組み込まれている教室が5室あります。それから、メディアセンターに頼むと持ってきてくれて収録できる機材が2セットあります。持ち運びの機材を使えば、基本的には学内のどの教室や施設でも使用できます。

これは世界的にもかなり有名なシステムで、さまざまなところで使われているようですが、私は先ほど言ったiTunes Uに載せた授業をメディアサイトで収録してもらいました。このときは、授業の前の休み時間にメディアセンターの方が2人来て、台車にメディアサイトというハードウェアとビデオカメラ、それからケーブル類を一式持ってきてくれて、教室にセットしてくれました。軌道に乗れば、あとは私がスタートボタンを押すだけで、終わるころに、またメディアセンターの方が来て、片付けてくれるという段取りを14回繰り返す経験をしました。

このシステムだと、画面のレイアウトを後から決められます。私の動画、それからスライドのデータのどちらを大きくするか、どれぐらいの配分にするかも後から決められる。それから、メディアセンターの方が専用ツールを使用すれば、映像の中抜き、スライドの挿入・削除などが容易に行えます。そういうシステムです。一番大事だったのは、やはりメディアセンターが全面的にバックアップをしてくれるので、これは心強いです。非常に助かりました。私は何の苦労もなく、ただ普通に授業をやっていただけです。

ただ、私にとっての唯一の欠点は、好きな時間、好きな場所で収録ができない点でした。私は、来週の授業用の動画をいつ撮るかは、だいたい夜でしたが、いつも決まってはいませんでした。そのため、何曜日の何時からどこでやるということを決められてしまうと、それが足かせになってしまうということがあって、私の性格的にこれは非常に大きな欠点で、今回はこれは使わないことにしました。

【スライド①-7】

2番目の方法はPowerPointです。マイクロソフトのPowerPointを使うと、「スライドショーの記録」という機能があって、音声も一緒に記録することがで

きます。そのため、それを使うと、PowerPointを持っている方はたぶん何も投資せずに、簡単にできてしまう。後からの編集も比較的容易です。それから、たぶん周りを探せば経験者が誰かいるのではないかと思います。そして、自分のPCでできます。だからどこに持っていても、どこの部屋でもいつでもできる。

PowerPointを持っている必要がありますが、立教大学では学生は全員無料で手に入りますので、問題がない。ただ、これの一番大きな問題は、私が普段PowerPointを全く使っていないということで、最初からPowerPointを使うという解はありませんでした。**【スライド①-8】**

結果的に、KeynoteとQuickTime Playerという組み合わせにしました。Keynoteとは、今私がプレゼンで使っているこのアプリケーションなのですが、PowerPointのApple版だと思っていただければ結構です。だからPowerPointと基本同じです。QuickTime Playerとは、MacのOSに入っている動画の再生ソフトです。もう少し広い意味があるのだと思いますが、基本的には動画を再生できるソフトで、しかし動画の収録が可能で、それを使いました。

Keynoteで、今やっているように画面を出します。QuickTime Playerを同時に立ち上げて、QuickTime Playerが持っている画面収録という機能を利用し、マイクを付けてペラペラとしゃべって、スライドのカーソルを動かしながら、こうやって全く今のような形でやっている様子を、動画としてハードディスクに記録します。

これは画面を収録するソフトなので、PowerPointであろうが何であろうが、何でもできます。Keynoteに限らずできます。なので、Macを使っていればQuickTime Playerがインストールされていますので、特別なソフトを買わずにできます。再生自体も、普通の動画ファイルですから、特別なソフトは不要で、自分のMacでいつでもどこでも収録が可能であるという点で、私は結果的にこれを採用しました。ただ、それなりに大きな欠点が2つあります。

1つ目は、スライドのデータも含めて動画として記録するので、できたファイルのサイズが大きくなるという欠点です。先ほど2番目の方法でご紹介したPowerPointの場合は、スライドのデータは文字としてセーブ、あるいは静止画として基本的にはセーブしてくれるので、ファイルサイズが比較的小さくできますが、QuickTimeは画面を動画としてそのままセーブしてしまうので、画面が止まっても、動画としてのサイズが、ある程度増えてしまう。そのため、ファ

イルサイズが大きいという欠点があります。

それから、これはいわゆる動画の1つのファイルになりますので、後からの編集はほぼできなくて、一発勝負であるというのが欠点です。しかし、私にとってはこれしか解がなかったので、これを採用しました。**【スライド①-9】**

2番目、ファイルの置き場をどこにするかは、もうBlackboard一択でした。どのような形で置いたかという、Blackboardの「教材」のところにフォルダを3つ作って、一番上は動画ファイルを入れる専用のフォルダで、2番目には、これは案外大事だったのですが、そのスライドのデータをPDF化したものをそのまま載せてあります。それから3番目には、授業中にやる演習問題などを載せてあります。

あと、[スライド上で] 青線を引いてある部分ですが、Blackboardの機能として、統計情報が得られます。統計情報とは、学生がどれぐらいアクセスしたかで、それを見られます。後で少しその例をお見せしますが、これはそこそこ役に立ちました。**【スライド①-10】**

3. 反転授業をやり始める

これで、どのようにやるかはだいたい決まったので、とりあえずやり始めまし



た。[収録の様子を写真で示すスライドを指し] こんな感じです。これは2015年度の秋学期の科目でしたので、2015年度の夏休み頃から収録を始めました。当時は今みたいに皆さんにお話しをする日が来るとは思っていなかったので写真は撮っておらず、これは再現写真です。2～3日前に撮りました。私の部屋は、実験室に私の机があるので、実験装置の音がボコボコうるさいし、学生が時々いきなり入ってきたりしますから、そこでは収録ができません。私の隣の部屋に事務室があって、そこは夜は人がいないので、その部屋に夜9時から11時ぐらいに行き、1人でボンボン、この画面に向かって話すという収録をしました。

まず、収録をするときに、音声を入れなければいけないので、マイクが必要です。たぶんこれは結果的に思うと、PC本体が持っているマイクでもできたと思いますが、私はiPhoneなどに付属の普通のマイク付きのイヤホンを使いました。最初、これを首にかけて、口元にマイクが来るやり方でやっていたのですが、くしゃみをしたり、せきをしたりすると全部入ってしまい、それがうるさいということで、机の横に置くだけでやりました。

それから、スライドのコピー、これも案外大事でした。私も今Macの画面には、次にどのようなスライドが来るかが常に表示されるやり方でやっています。やはりそうしておかないと、話のつながりがうまくできません。次に出るスライドを表示することがこの収録方法でやるとできないので、スライドを印刷したものを手元に置いて、それを見ながらやりました。【スライド①-11】

やり方ですが、まあやってみた。最初やったときに、アップをして、それから小テストもやらせたのですが、その小テストの答案に質問や要望や文句、何でもいいから書くように言ったら、文句が噴出でした。「ファイルサイズが大きすぎる」、「動画が見られない」、「動画の時間が長い」という不満が出てきました。【スライド①-12】

その対応が実は案外大変でした。ファイルサイズが大きすぎるという文句に対しては、文句というか苦情ですね、これはもっともな苦情でしたが、ファイルサイズをなんとか小さくしました。結局、私はよく分からなかったもので、シェアウェアを買って、それでやると、画質を落とさずにファイルサイズが小さくできたので、それを採用しました。

それから、見られないという点、案外対応が難しかったです。しかし、見られない人がいると困るので、私の手元にあるMac、Windows、それからiPhone、

iPadで見られることは事前に確認していたのと、8号館のPCで見られることも確認はしていたのですが、やはり見られない学生がいる。

後で分かったのは、ほとんどの学生はスマホで見えています。今の学生は、なぜかPCはほとんど使いません。動画を見るといったらスマホでしか見ない。なので、iPhoneならば、私が手元にあるため対応できるのですが、Android系になると、会社によってもOSのバージョンが多少違ったりするので、どうにも対応ができなくて、最終的には、「WindowsかMacのデスクトップPCだけに対応する、これで見られなければ言って来い」というやり方にして、一応解決しました。

それから、動画の時間が長過ぎるという文句は、内容を細切れに分けることで対応しました。最初は数百メガバイトぐらいあったファイルが、数十メガバイトぐらいまで減らすことができました。【スライド①-13】

それから、授業中にやったことですが、最初、授業の前半に小テストをやって、後半は、「周りと相談して小テストの問題をきちんと解けるようにしておけ、理解しろ」というやり方でやりました。しかし、私からいうと、「動画を見てこない」と問題は解けないからね」という学生へのメッセージのつもりでしたが、授業の後半がどうしてもだれてしまう。友達と相談して解く部分が、どうしてもうまくいかなかったので、その前半、後半を逆転したところ、うまくいきました。

授業の前半に、その時間だけ勉強する学生が増えて、その場で動画を見ている



学生もいましたが、こうすると、動画を見てこなくてもなんとかになってしまうのですけれども、ここは目をつぶることにしました。結局、最終的な動画を完成させるまで、だいたい3年かかりました。【スライド①-14～15】

4. 反転授業の効果

〔「動画視聴回数と点数の相関」のスライドを指し〕これがBlackboardの統計情報を使って作ったグラフなのですが、横軸が学生が何回動画を見たか。40、80、120、160、これは10回分の動画がありますから、その回数。縦軸が、10回やった小テストの総点、40点満点です。白丸と赤丸の区別は、とりあえず同じものと思っていただきたいのですが、なんとなく最初だけ相関があり、点数が上がっていき、その後、なんとなく平らになるという傾向が見えました。これが期末試験になると、実は少し相関が弱くなる感じです。この白丸は実は期末試験を欠席した学生で、塗りつぶしが受験した学生なので、この白丸の部分がこっちの期末試験の結果では抜けているので、成績の悪い学生が減ってしまったのが理由かなと考えています。【スライド①-16】

それから授業評価アンケートの内容ですが、基本ポジティブな学生が多いです。やはり「自分のペースでできる」とか、「何度でも見返せる」とか、「復習がいつで



もできる」というコメントが非常に多かった。それから、ネガティブなコメントで一番困っているのは、「動画がつまらない」とか「眠くなる」というコメントです。私もやってみて思ったのですが、やはり授業みたいに聴いている方がいるときのテンションと、画面に向かってボソボソしゃべっているテンションって、やっぱり全然違って、画面に向かって1人でテンションは上がらないので、ここはなかなかつらいですね。【スライド①-17】

それで、効果の1つとして、[「効果：授業評価アンケート」のスライドを指し] このグラフは、横軸が年度です。2015年度から反転授業を開始しました。初年度、[左側のグラフの該当する点2つを指して] これは授業評価アンケートの授業の進め方と満足度のポイントです。2016年、2年目にやっと効果が出て、ポイントが上がりました。3年目はなぜか少し下がっています。一番効果があったと思っているのは、この右側のグラフで、授業外学修時間が、普通の授業のときに比べて2016年度では約倍になっている。これは私にとっては劇的な効果で、やった甲斐があったなと思っています。それから、この「GPA」のプロットですが、これは最終的な成績を使って、
$$[(Sの人数 \times 4 + Aの人数 \times 3 + Bの人数 \times 2 + Cの人数 \times 1) \div 学生の数]$$
で計算したものです。やはり授業外学修時間が増えたことによって成績も上がったのではないかと考えています。【スライド①-18】

I さいごに

私は完成に3年かかりました。立教大学はメディアセンターがあって、ここは非常に対応もよくて、困ったときは何でも聞けば対応してくれますので、「誰でもできる」と私は書きましたが、たぶん人によって引っかかるところは違うと思いますけれども、困ったらメディアセンターに相談すると、だいたい解決します。あと、非常に大事だったのは、完璧は目指さないこと、最初に決めておいてよかったなと、これは強く思っています。以上です。【スライド①-19】

○司会 平山先生、どうもありがとうございました。

【スライド① - 1】



教材から授業を変える 動画で深める学び 「誰でもできる反転授業」

- 「物理計測論」
- 「反転授業」
- 反転授業のやり方（平山の場合）
- 効果
- （時間があれば）実演

理学部物理学科 平山孝人

hirayama@rikkyo.ac.jp
http://s.rikkyo.ac.jp/HIRA



大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 1

【スライド① - 2】



学生に公開している動画



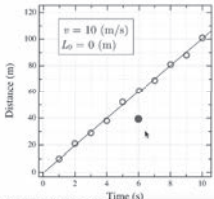


最小自乗法

直線関係 $y = ax + b$: 最適な a 、 b を決める
 (誤差を考えない場合)

$$L = vt + L_0$$

きれいなデータなら：目の子で（なんとなく）



$v = 10 \text{ (m/s)}$
 $L_0 = 0 \text{ (m)}$

- 全ての点の近くを通る。
- 線の上と下にある点の数が同じ。
- 余りにもかけ離れた点は無視する。

7-1 最小自乗法 誤差を考えない場合 物理計測論 3

大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 2

30 大学教育開発研究シリーズ No.27

【スライド① - 3】



「物理計測論」



- 物理学科専門選択科目
- 履修者数：90 - 100人（1年生7割，2年生以上3割）
- 出席率：8～9割
- 誤差論，実験データ（数字）の処理法
- Excelの中で何をやっているのかを理解させる，一度は自分の手で計算してみる
- 授業を聞いてわかったつもりになっても役に立たない

大学教育開発・支援センターシンポジウム
2018.07.10
3

【スライド① - 4】



「物理計測論」

2014年までのやり方



- PCを使った普通の授業
- 授業時間中に15 - 20分の小テスト（10回程度）
- 「演習問題をもっとやって欲しい」（アンケート）
- 授業時間中の質問は「ほぼ無い」
- 学生は私がスライドを使ってしゃべっていることを「ただ聴くだけ」
- 学生にとっては動画を見てのと同じじゃないか？ 反転授業か？
- 物理学科の経験のある教員に話を聞く：うまくいくとは限らない...
- シラバスに書いてしまった.... → やらざるを得ない

大学教育開発・支援センターシンポジウム
2018.07.10
4

【スライド① - 5】



反転授業

反転授業は、従来の授業形態をまさに「反転」させたもので、家庭でいわゆる「授業」を映像教材を用いて予習の形で受講し、学校の授業の時間では通常「宿題」として扱われる演習や、学習内容に関わる意見交換などを行うものです。つまり、学びのインプットとアウトプットの場を全く逆にするのです。

(ベネッセ：<http://benesse.jp/kyouiku/201609/20160902-1.html>)

- 事前に動画をアップする
- 学生はそれを授業前に見て予習する
- 授業時間中には演習問題を解く

大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 5

【スライド① - 6】



反転授業のやり方（平山の場合）

大原則

- できるだけ簡単な方法でやる
- 動画はスライド＋音声のみ
- 完璧を目指さない

始めるにあたっての検討事項

1. 動画の収録をどうする？
2. ファイルの置き場はどこ？
3. 授業時間内にやることは演習だけ？

大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 6

【スライド① - 7】



反転授業のやり方（平山の場合）

動画の収録方法

1. Mediasite

← お勧め

<http://www.mediasite.co.jp/>

- 授業の収録に適した映像収録・編集・配信システム
- 立教大学に導入済み（セミナー・講演会の収録など）
- ポータブル2台、教室5室（8号館）
- 平山は経験あり（2014年度「原子分子物理学」、iTunesUに公開）
- レイアウトが自由に決められる、後から編集が比較的容易
- メディアセンターが全面的にバックアップしてくれる ← 心強い！

唯一の欠点：好きな時間・場所で収録できない



大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 7

【スライド① - 8】



反転授業のやり方（平山の場合）

動画の収録方法

2. PowerPoint

- PowerPointの「スライドショーの記録」
- ファイル容量が小さい
- 後からの編集も比較的容易
- （多分）経験者が周りにいる
- 自分のPCでできる。いつでも、どこでも。
- PowerPointを持っている必要あり（立教では問題なし）



大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 8

【スライド① - 9】



反転授業のやり方（平山の場合）

動画の収録方法

3. Keynote + QuickTime Player ←これに決めた！

- Keynote : Apple社のプレゼンテーションソフト（OS付属）
- QuickTime Player: Apple社の動画再生ソフト（OS付属）
- KeynoteでのプレゼンテーションをQuickTimeで画面＋音声を収録
- PowerPoint + QuickTime Playerでも可能
- 再生に特別なソフトは不要
- 自分のMacでいつでもどこでも収録可能

欠点

- スライドも含めて動画として収録 → ファイルサイズが大きい
- 後からの編集はほぼできない → 一発勝負



大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 9

【スライド① - 10】



反転授業のやり方（平山の場合）

ファイルの置き場

Blackboardの「教材」





大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 10

【スライド① - 11】



取りあえずやり始めた

(2015年度秋学期)

こんな感じで収録





手元にスライドの
コピー

ページ送り

iPhoneの
イヤフォンマイク

大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 11

【スライド① - 12】



取りあえずやり始めた

(2015年度秋学期)



- 動画：QuickTimeが出力する .mov ファイル
- ファイルサイズ：1分あたり10 MB程度
- 1ファイルの時間：20 - 30 分、ファイルサイズ 数100 MB
- 1週間以上前にはBlackboardに動画とPDFをアップ
- 毎回小テストの答案に質問・要望・文句を書かせた

学生から文句噴出！

1. ファイルサイズが大きすぎる！
2. 動画が見られない！
3. 1つの動画の時間が長すぎる！

大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 12

【スライド① - 13】



取りあえずやり始めた (2015年度秋学期)

学生から文句噴出！

1. ファイルサイズが大きすぎる
 - .mov → .mp4 に変換
 - ファイルサイズは小さくなったが画質が悪くなった
 - Sharewareを購入して変換：MacXVideo Converter Pro (～US\$ 46)
 - 画質を落とさずに、1分あたり3MB程度
2. 動画が見られない
 - 私の手元のMac, PC (Win), iPhone, iPadで見られることを確認
 - 8号館PC教室で見られることを確認
 - ほとんどの学生はスマホで見ている！
 - 「デスクトップPCのみ対応する」と宣言
3. 1つの動画の時間が長すぎる
 - 内容を細かく分けて1ファイル10分程度に

20 - 30 分 (数100 MB) → 10 - 15 分 (50 MB以下)

大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 13

【スライド① - 14】



取りあえずやり始めた (2015年度秋学期)

授業時間内に何をやるか

前半：小テスト 後半：周りと相談して問題を解く

- 「動画を見てこないと問題解けないからね」
- 授業の後半が「だれる」

学生の希望を聞いて順番を逆にした

前半：周りと相談して問題を解く 後半：小テスト

- 授業の前半にがんばる学生が増えた
- 動画を見てこなくてもなんとかなってしまう

大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 14

【スライド① - 15】



使った動画



- 1 年目（2015年度）：全て新規作成
- 2 年目以降は楽ができるかも？？
- 自分の中での不満・1 ファイルが長すぎる・年度を入れてしまった...
- 2 年目（2016年度）：全てを新規に収録
- 3 年目（2017年度）：一部のみ収録し直し（1/3くらい） [ほぼ完成]
- 4 年目（2018年度）：楽ができる（はず）

大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 15

【スライド① - 16】



動画視聴回数と点数の相関



小テストの総点
(10回、満点40点)

期末試験の点数
(100点満点)

1 回の小テスト

視聴 4 回まではそこその相関あり
視聴 4 回以上は高止まり

大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 16

【スライド① - 17】



授業評価アンケート



POSITIVE

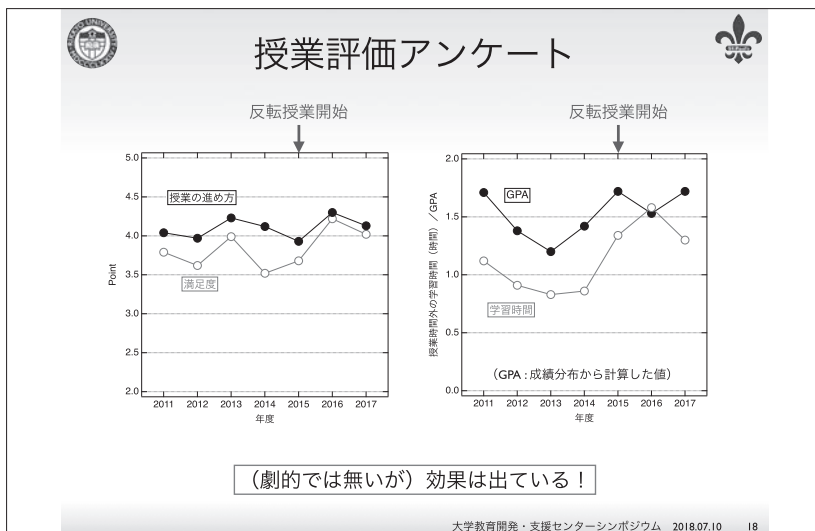
- 何度でも見返せる
- 自分のペースで勉強できる
- いつでも復習できる
- 質問がしやすかった（小テスト解答用紙に質問を書くように毎回伝えた）

NEGATIVE

- スライドPDFがあるから動画はいらない・PDFを見るだけでは分かりにくい
- 普通の講義形式の方が良い・反転授業は良くない（年に一人くらい）
- 咳払いがうるさい
- 動画がつまらない・眠くなる（← 収録する時にテンションが上がらない）

大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 17

【スライド① - 18】



【スライド① - 19】



最後に

- 完成に3年（平山の場合）
- 授業の収録はPCさえあれば「なんとかなる」
- 困ったらメディアセンターに
- 1コマ分の動画は、30 - 50分程度（実際の授業よりも短く済む）
- 学生はPCではなくスマホ、「PCはめんどくさい」
- 「完璧」を目指してはいけない
- 科目によっては「反転授業」は非常に効果的

大学教育開発・支援センターシンポジウム 2018.07.10 19

第2部



「環境と文化」における ドキュメンタリー映像の 活用

社会学部 兼任講師
金子 祥之 氏

○**司会** 続きまして、金子祥之先生からお話を頂きます。金子先生は、本学社会学部の兼任講師でいらっしゃいます。受賞科目は、「環境と文化」という科目です。研究されている分野といたしましては、民俗学および環境社会学になります。本日は、『「環境と文化」におけるドキュメンタリー映像の活用』というタイトルでご報告を頂きます。それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに

○**金子** ただ今ご紹介にあずかりました金子祥之と申します。お招きいただいたのは、光栄なことですが、本日は大変気が重いのが本心です。その理由は2つあります。第1に、見ていただいて分かるとおり、私は若者でして、前に座っていらっしゃる皆さんのほうがずっと教育経験が豊かだと思います。けれども、せっかくチャンスを頂きましたので、改めて自分が講義の中でどんなことをしているのかを問い直す、いい機会を頂いたと思って、そのつもりで報告させていただこうと思います。【スライド②-1】

そのように決心しながらも、気が重くなった第2の理由はこれです。私はなぜ動画を授業の中で使っているのかを改めて考えるために、さまざまな論文を読みました。【スライドを指し】ここに小林先生の指摘が出ていますけれども、端的に言って、動画は分かりやすいから使うという水準では浅い、ということが指摘されていて、私が答えようとしていたことが先に見透かされていたような気分になり、また大変暗い気持ちになりました。自分自身がどのような取り組みをして

きたのかを、私なりに真剣に考えてみました。その内容をご報告させていただきます。【スライド②-2】

本日の報告の流れですが、最初にこの授業の概要をご説明いたします。その上で、試行錯誤のプロセスをしゃべってほしいとの依頼でしたので、試行錯誤の過程として、この授業の抱えている欠点を指摘したいと思います。なぜ教材としてドキュメンタリー映像を使うことになったのかということ、実は、その欠点を克服するためにドキュメンタリーという方法がとてもしいのではないかと気付きました、こういった取り組みを進めていきました。そのプロセスを皆さんにご紹介していきたいと思います。【スライド②-3】

1.「環境と文化」という科目

私が担当する「環境と文化」という授業は、毎年200名から、多い年だと300名を超えるくらいの履修者がいます。社会学部の授業ですが、比較的他学部の方々も履修してきます。だから社会学を前提としてしゃべると、理解にばらつきが出てしまう授業です。多くの分野を学んでいる学生たちがいることは刺激になります。

講義タイトルの「環境と文化」というと、とても広い対象を扱うことになって



します。科目名は好きなのですが、少し絞らないと、とても分かりにくいイメージがあるわけです。そこで、対象と方法、2つの形で中身を絞っています。

まず「環境」「文化」、それぞれの対象です。「環境」ですが、この授業では、いわゆる環境問題について扱います。ただし、グローバルな環境問題よりも、地域の中で生じている環境問題に焦点を当てています。そのため、ここで扱われている環境というのは、地域社会の中における自然環境あるいは生活環境になります。「自然環境と生活環境とは違うじゃないですか」と言う方がいらっしゃるかと思います。けれども、例えば、田んぼを考えてもらえばいいと思います。田んぼは自然の環境なのか、人工の環境なのかと言われると、困ってしまうところがありますね。両者は簡単には切り離せないことがご理解いただけると思います。したがって、この授業では、自然環境・生活環境、両方とも扱っていきます。

そして、「文化」という言葉も非常に広い意味を持っています。ですので、この講義ではローカルな文化をイメージしていただければいいと思うのですが、地域の生活文化、地域文化に焦点を当てながらお話ししています。**【スライド②-4】**

次に、絞るときの方法です。これは私の専攻が関係しているわけですが、主に社会学、民俗学、人類学の領域のお話をしています。とりわけ、この授業では、私の専攻である民俗学や社会学を中心としてお話ししていくことになりますが、実は映像を使うというヒントをもらったのは人類学の人たちからでした。**【スライド②-5】**

この3つの学問を、この短い時間で説明しなければいけないので、大胆に抽象化していきますが、端的に言って、この3つの領域は、他者理解に大変ポイントを置いていていると思います。というのも、社会にせよ、文化にせよ、自分自身はそこにどっぷりと漬かり込んでいるわけで、簡単に認識することはできません。したがって、映し鏡が必要なわけですね。他者というものを通して、自分自身の所属している社会や文化を理解していこうとします。

社会学の場合は、「いま・ここ」にある社会というものを、他者を対象として、それを映し鏡にして自分の社会を認識していきます。社会学というと、マイノリティを対象とするイメージがあるかもしれませんが、それは、マイノリティに注目すると、自分自身は普段何気なく過ごしている社会の違った側面が見えることになるからです。つぎに民俗学という分野ですが、その点で言うと、民俗学は「ここ」(=日本社会を対象とすること)は共通していますが、「いま」ではない

のです。過去の自分たちの社会を映し鏡にして、文化というものを捉えていきます。人類学の場合は異民族ですね。海外を研究対象にするわけです。時間軸としては「いま」ですが、見ていく社会は「あそこ」、自分とは全く縁のない社会というものを検討対象にしながら社会や文化について考えていく、そういう特性があると思います。【スライド②-6】

私自身は民俗学的方法を使いながら社会学に接近している研究者なので、こういう範囲をカバーしながら「環境と文化」は運営されています。そういう意味で、シラバスの講義タイトルには「民俗学・環境社会学の視点から」という副題が付いているわけです。【スライド②-7】

2. 欠点を長所に変える

次に、試行錯誤の過程をお話ししたいと思います。私が初めて授業を担当させていただいたのは、この大学ではなく2014年のことで、地方の公立大学でした。そこで担当したのも環境社会学という分野でしたので、この「環境と文化」でお話ししている内容と非常に重なりがありますが、そこで授業をしていて、私の授業は2つ欠点を抱えていると気付きました。それは学生たちとの間にある2つの距離感の問題でした。

1点目は、対象から生まれてしまう学生との距離感です。この授業で扱っているのは、確かに多くの学生たちが所属している「ここ」、日本社会の出来事です。ところが、それは受講者の経験している「ここ」とは違うわけです。地域の自然環境あるいは生活環境を取り上げていくと言いましたから、自然環境と深く関わってきた地方のコミュニティを取り上げて、そこに生きる人たちの生活実践をしゃべっていくわけです。したがって、授業の中心になるのは、都市よりも農村や山村、漁村での出来事になります。

日本は、統計の取り方によって全然違いますが、都市人口が9割を超えているといわれています。あるいは、過疎地域に住んでいない人と住んでいる人の比が9：1なのですね。ところが、行政レベルで見ますと、過疎地域というのは約半数なわけです。だから、私の授業は、自治体でいえば、その半数の側、あるいは人口でいえば1割の人たちが住んでいる側のほうを深く取り上げていくことになるので、受講者にとっては、対象との間に距離があるわけです。つまり理解しに

くいということですね。【スライド②-8】

そして、もう1つ、時間軸の問題から生じる距離感、理解しづらさがあります。それは私の研究方法が持っている分かりづらさです。「いま」のことを共時的に論じてくれば、学生たちもとても分かりやすいと思うのです。しかし、私は文化論というアプローチの仕方をしていて、つまり民俗学が抱えているように、過去の社会を映し鏡にして今の社会を理解しようとするアプローチを取ります。したがって、昔話にされてしまうのですね。一生懸命こちらがプレゼンテーションをしても、「それは昔の出来事でしょう」と処理されてしまうわけです。

本日は、また後で動画を見ていただくのですが、社会学や人類学を学んだことがある方だったらご存知のキーワードだと思いますが、「擬制的親子」を扱っていきます。それは例えば、取上げ親だとか、名付け親だとか、^{えぼし}烏帽子親だとか、^{かね}鉄漿付け親だとかが具体例です。生みの親以外の親を指しています。素朴にそれを解説していくと、いくら私がそれを楽しみながら説明しても、学生たちは、「なんじゃい、それ」と、皆さんお眠りになっていくわけですね…。名付け親くらいは具体的にイメージできるかもしれませんが…。このパターンではまずいなど気付いたわけです。いくら一生懸命に解説しても、昔話にされてしまうのは困るわけですね。【スライド②-9】

なぜこのようになってしまうのかと考えていると、このような指摘に出くわし



たりします。[スライドを指し] 玉野先生は社会学者で、ここでは若手の研究者をイメージしながら論じていますけれども、今、社会、あるいは文化と言い換えてもいいと思いますが、そういうものが大変認識しづらくなっていると。その結果、社会学という領域では、自分を中心とした身の回りの世界に関心が集まっていて、個人史や生活史といった方法がもてはやされているのではないかという指摘をされています。

この指摘を素朴に受講者に当てはめていいかどうかは別の問題かと思いますが、しかし、研究者レベルでも自分の身の回りを超える世界のことは認識しづらい現状があるわけです。とすると、私の授業の場合は、空間軸のレベルでも、あるいは時間軸のレベルでも、受講者の身の回りの世界と距離があるわけですね。はっきり言って、取っ付きづらいわけです。こういう課題を抱えているなど、授業をしながら感じました。

そこで、なんとかこの欠点を長所に変える方法はないかと模索し始めたわけです。【スライド②-10】

3. ドキュメンタリー映像を見る

これから、養子を巡る近年の動きに関する動画を見てもらうことにします。先ほど言ったとおり、講義の中でこの動画を扱う回は、日本社会の中の擬制的親子関係を知ってもらうために見る回になります。この講義では、地域社会を扱っていきますから、講義の初めの数回は地域社会を理解するための基礎的な内容を紹介していきます。擬制的親子関係を解説するのは、地域内の社会関係を知ってもらうためです。つまり、「環境と文化」ではイントロダクションにあたる部分です。

そして、この擬制的親子関係を研究した研究者として、有賀喜左衛門という人がいるのですが、その有賀喜左衛門は、私の先生の先生の先生です。昭和初期の研究になりますが、それを理解するために、動画を見ていくことになります。

普段の講義でも、動画を視聴する際には、いくつか前提をフォローしてから見ていただきますので、端的に2つのことを指摘したいと思います。第一に、いま日本社会で、生みの親が育てられない場合、9割の子どもたちは乳児院に預けられているという現状があります。このような現状を改善するために、さまざまな

政策的措置あるいは社会的措置が考えられていて、その1つの方法として、特別養子縁組といわれる方法があります。ところが、第二に、これはほとんど認知されておらず、最近、さまざまな方が努力しているので若干件数は上がっていますが、500件ほどしかないわけです。以上のことを前提にして、動画を見てもらいたいと思います。【スライド②-11～12】

〔動画再生を準備。音声が流れるもののスクリーンに映像が出ず、調整を行いながら〕どうしても動画を扱うとこのようなトラブルは付き物です。…悲しいかな、こういうときのほうが学生の注目が集まるのですよね。しゃべっているときよりも、「先生、どうしたんだ」と、グッと注目が集まります。そのためこのようなトラブル含みで動画を考えないといけないなとはいつも思っていて、だから私はいつも3種類ぐらい再生方法を考えていきます。それでも再生できなかったことがあり、そのときは、「本来これを見てもらいたかったのだけど」としゃべったこともあります。

では、これでいきたいと思います。全部を見ていると1時間の番組なので、途中から見ていただくことにします。さっき申し上げたように、特別養子縁組という制度を巡るドキュメンタリー番組です。



*この日視聴したのは、「この子のために～命をつなぐ特別養子縁組～」の一部分。このドキュメンタリー映像の概要は以下の通り。

昭和62年に、特別養子縁組制度が新設されてから、数多くの家族が生まれてきた。我が子を養子に出さざるを得ない母親、他人の子供でも育てたい夫婦。それぞれの願いによって新たな家族が会う瞬間をカメラが優しい眼差しで見つめる。そして、生みの親の存在を告知された女性が苦難を乗り越えて奇跡的に母親と再会を果たす物語。「家族の在り方」とはどのようなものかを問われる名作。

(朝日放送HPより http://archives.bs-asahi.co.jp/documentary/prg_003.html
2018年8月23日確認)

〔動画再生開始。とばしながら部分的に再生し、適宜解説。〕

産みの親が子どもを育てられない、切実で切迫した状況が描かれています。そうした女性たちが拠り所としているのが、このNPOです。今、行政的なサポートがないので、こういう民間団体が支援しているということですね。このNPOを通して、年間60件ほどの養子縁組が行われていますから、かなり多くの数だということが分かるかと思います。子どもを育てられない親は、経済的に困窮している場合が大変多いので、このNPOでは出産の段階からこうしてお手伝いし



ているわけです。

この特別養子縁組では、実子として扱われることが大変大きいですね。法律的な知識がなければ、戸籍を見ても養子だと分かりません。そのように制度設計されています。この制度が、家庭で幸せに育てるということと、亡くなってしまいそうな小さな命を助けるという、2つの役目を背負っているのがよく分かると思います。とはいえ、事態は簡単ではないことが、次の映像で分かると思います。

子どもを里子に出した後、このNPOをお手伝いしていた方が突然いなくなってしまったというシーンです。学生にこのようなVTRを見せると、こういう制度を法化していくと、簡単に子どもを捨てられる社会になるのではないかという批判が来ることがありますけれども、手放すお母さんも、そんな簡単に手放しているわけではないことは、この映像からも大変よく分かるかと思います。このお母さんの場合は、出産してから1カ月たたないうちに、もう里子に出してしまうわけですね。そういった悩みを吐露されているわけです。

このNPOでは、出産が終わった後にマッチングをするわけですね。どの家庭に里子に出すかまで仲介していただきます。そして、あと法律上の手続きがさまざま残っていますから、そういったこともサポートしてくれます。この後が本当はクライマックスですが、本日はここでやめたいと思います。

〔動画再生終了〕

〔視聴したドキュメンタリーの出典スライドを表示し〕今見ていただいた映像は、朝日放送で放送された「この子のために」という番組でした。このことを使って授業にフィードバックしていきます。見たからこそ展開できることは何なのかを解説していきたいと思います。

ご視聴いただいたドキュメンタリー映像は、大変優れた作品です。さまざまな事情から子どもを育てられなくなってしまった女性たちの苦悩。そして、彼女たちと生まれたばかりの小さな命を何とかサポートしようとする人々の努力が描き出されていました。「いま・ここ」の社会的課題が描かれていたと言えるでしょう。

おそらくこうした問題は、学生たちに身近な問題ではないでしょう。そうであるからこそ、こうした映像を見ると、それがいかにも現代だけの課題であるかのように錯覚してしまうかもしれません。しかし、そのような問題は、日本社会においていつの時代にも存在していたはずで、過去はどうだったのかということ

で、この有賀喜左衛門の「捨子の話」という研究を紹介します。配布資料に文章が載せてあります。【スライド②-13】

〔配布資料を指し〕実は有賀の研究は大変面白くて、かつて日本社会には「子どもを捨てる文化」があったことを指摘していくわけです。ポイントだけ指摘しますと、「捨子はいかなる心持でなされたものであろうか」と問いかけるわけです。すると、このような答えが返ってきます。「もちろん捨子はかならず拾われるのを予期していたにちがいないのである」。実は、この「捨子」という言葉は、「拾い親」という言葉とセットで存在していたわけです。

次の段落の2行目から読みます。「旧社会においては」、古い時代においては、「その社会機構の中に」、社会システムの中に、捨子を受け入れる余地が今日より多くて、特に「目指して捨てられたような家では」、地域の顔役になっている家ですよ、そういう家では「かならず拾い取るのが常であった」と指摘しております。

そのことを踏まえて、有賀はその当時の社会論を展開していくわけですが、今日では捨てても安全に拾われる機関が具備されていないから、かつては地域の顔役たちが必ず拾ってくれたわけですが、近代になって家が血縁関係を中心に再構成されていくことになって、私たちの家観念、家族観念が大きく変わっていったわけですね。そうなると、赤の他人である捨子は安全に拾われることはなくなっていくから、子どもを育てられない母親は、捨子の暗い運命を想定しなければいけないのだと言います。その結果、近代になって、一家心中が出てくるのだと指摘しているわけです。

そのことを踏まえて、実は日本社会で「親」と言ったとき、血縁関係を含んでいないことを有賀は指摘していくわけです。「擬制的親子関係」とは、まさにそれですね。名付け親というのは、産みの親ではない人に名前を付けてもらい、生まれた子の親になってもらう方法です。あるいは、結婚式の仲人というと、今は飾りのようになっていますけれども、かつてはそれも一生付き合っていく仲人親だったわけですね。

このように、地域社会では人間関係を、いわば網の目のようにつくっていった、1人の人が成長していく上で、親というのを複数持っていたわけです。ところが、現代の私たちの社会では、「親」が産みの親だけに限定されている現状があります。またそのように限定されることで、仮に産みの親が育てられない状況が生じ

たときには、困難な状況が出現していました。ときに私たちは、田舎の人間関係は面倒で…といった評価をしてしまいがちです。しかし、地域社会では人間関係を網の目のように張り巡らせてきたことの意味を、あらためて考え直す必要があるのではないのでしょうか。

もう時間がないので、このことには触れませんが、今紹介してきた問題は、実は民俗学の成立と今の問題が深く関わっています。【スライド②-14】【資料】

4. なぜドキュメンタリーか

では、なぜ教材としてドキュメンタリー番組に行き着いたのかですが、これは明らかに2つの欠点に対応するためでした。1つは、農山漁村という空間的に離れた場所の問題を扱っていきませんが、実は今ドキュメンタリー番組の中で、農山漁村の課題や社会問題を描いてくれる作品が、大変多く出てきています。そういう意味で、受講者との空間的距離感を埋めるツールに使えることを感じました。

そして2つ目です。ドキュメンタリーというのは、常に「いま」起きたことを大変短い時間軸で映しています。私はどちらかというと、今ご紹介してきましたように、通時的な方法でアプローチをしていきます。けれども、今見ていただいた



映像は「いま・ここ」の問題を取り扱っています。ドキュメンタリー映像は常に、このような短い時間軸であるという特性があります。けれども、通時的な方法論によって、こうした捨子の文化があったことを指摘されると、問題の捉え方はまた変わっていきますよね。そういう意味で、授業の中で違うアプローチを、この授業のアプローチというものを紹介できるという点でもドキュメンタリー映像が有効だと判断したわけです。しかも、過去の知恵である文化を、昔話ではなく、ある種の緊張感をもって学ぶことができると考えました。【スライド②-15】

私の授業の場合はドキュメンタリーがこう使えたというのが今までの話です。これから先は、皆さん方がどう使うかという話です。ドキュメンタリーについては研究書を読んでいくととても面白くて、ドキュメンタリー映像は「真実」を映しているか否かということで、ずっと論争があるわけです。真実か虚偽かという問いが繰り返されるなかで、落ち着いている部分はここです。

すなわち、ドキュメンタリーと言ったら何を指すのかといったとき、「何らかの現実をモチーフにした映像作品」を作っていることは共通理解として、作る側も見る側も持っているということです。つまり、その映像に切り取られた現実を基に、それを肯定的に論じるのもいいし、違った角度から論じるのもいいし、さまざまに展開することが可能だと私は考えています。

冒頭、小林先生の指摘、映像資料が分かりやすくするツールとして有効では浅



いことを紹介しました。私の報告もその水準を超えていないかもしれませんが、私なりに、学生とこの授業との間にある、心理的距離感を操作するのに映像資料が有効だと考えました。映像資料、特にドキュメンタリー映像を活用することによって、緊張感をもって、講義内容にふれてもらえると感じています。

もちろん、この方法がすべての講義に有効だとは、必ずしも考えていません。未熟な人間からアドバイスさせていただくならば、どういう目的や意図をもって、映像資料を活用するのかを明確にしておくことが大切だということに尽きると思っています。【スライド②-16～17】

5.さいごに

実はメディアの側も大学教育の中でこうした番組を活用する方向を模索しているようですので、おそらく私が今やったような取り組みというのは、今後、大学教育の中でごく普通に行われていくようになると思います。そうなると思うので、一言だけ、このことを指摘して終わりたいと思います。

実は、現実には良くない関係性が生じていたりもします。〔「メディアと研究・教育の健全な関係構築のために」のスライドを指し〕京都大学社会学研究科のホームページにこういうことが出ています。この声明は、大学院生の研究成果ないし研究のアイデアが、断りなくメディアの作品の中に登場してドキュメンタリーが制作されてしまったことを契機としているようです。そのために、社会学研究科の教員たちがこのような声明を出し、研究者の研究成果を番組で使うときは、きちんとクレジットを明示することを指摘することになったようです。

この声明では、同時に、私たちが教育の場面であれ、それから研究の場面であれ、マスコミあるいはメディアからヒントを得ている場合には、それを明示すべきだということを指摘しています。最近、小説の問題を巡って、今この点は大変熱く議論されているかと思いますが、私も授業で使う場合は、このようなことに気を付けていかなければいけないなと考えている次第です。

以上で報告を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。【スライド②-18～19】

○司会 金子先生、ありがとうございました。平山先生のご報告でもそうでした

けれども、映像を利用した取り組みに至るプロセス自体が、大変興味深いものでした。また、私は法学部ですが、今、特別養子縁組について関心を持っておりまして、ぜひ先生とゆっくりお話をさせていただければと思いました。



【資料】

捨子はいかなる心持でなされたものであろうか。もちろん捨子はかならず拾われるのを予期していたにちがいないのである。これは捨てた場所がかならず人の目につく場所であったのを見ても判るのである…普通には捨子はかならず盛装させて、守袋なり持たせ、籠に入れておくものであるが、中には子供の親がその子を育て難い理由や子供の行く末を頼むという意味の事などを書き認めた手紙を添えたのなどもあったのである。…捨て置きながら隠れて見ており、拾わなければその晩は連れて帰るという話もある。

捨てた子が拾われて、幸運の鬨を引き合てんとする願いが何よりも強いということは明かで、…旧社会においてはその社会機構の中に捨子の受け容れられる余地が今日より多く、ことに目指して捨てられたような家ではかならず拾い取るのが常であったから、捨てる親から見では自分の手もとに置くよりも捨てた方がいっそうの幸運を期待することが出来たので、子を捨てることには今日のごとき不安の伴うことは少なかったのである。

かく見て来ると捨子において捨てるという意味は、不用なものを捨て去るという意味ではないと見るのが妥当であって、捨子というのは自分にかわって子供を養う親を見つける一つの手段にほかならなかったのである。今日では捨てても安全に拾われる機関が具備されていないから、捨子の暗い運命を予想せずにはおられず、従って捨てるのに昔の如き心持はなく、捨てるは真に捨てるのであるという意識を抱かざるを得ないのであるから、子を捨てるのもはや母親の愛情が許さないし、また遺棄罪に問われる恐ろしさも伴うので、捨子するくらいならと考えて親子ともに死を選ぶ場合もあるのである。これは貧乏から来る捨子が一家心中に変わってしまう場合もあるのと併せ考えねばならぬことである。

有賀喜左衛門、2001(1933)、「捨子の話」
『有賀喜左衛門著作集Ⅷ 民俗学・社会学方法論』未来社

【スライド②-1】

「環境と文化」における ドキュメンタリー映像の活用

立教大学社会学部兼任講師
日本学術振興会特別研究員PD
(立教大学社会学部)
金子祥之
hiroyuki.kaneko34@gmail.com

【スライド②-2】

動画を活用する意味とは？

映像活用への誤解

教育現場における映像の利用を、初学者向けに問題を「分かり易く」するための方法とみなす「思い込み」である。...昨今の学力低下が著しい学生には、映像で関心をもたせなければならぬと発想してしまう「思い込み」である〔小林2011：34〕。

【スライド②-3】

報告の流れ

- ・ 講義「環境と文化」の概要
- ・ 試行錯誤のプロセス
➡ とっつきにくい!?
「環境と文化」の課題
- ・ 教材の工夫
➡ ドキュメンタリー映像を
活用することの意義

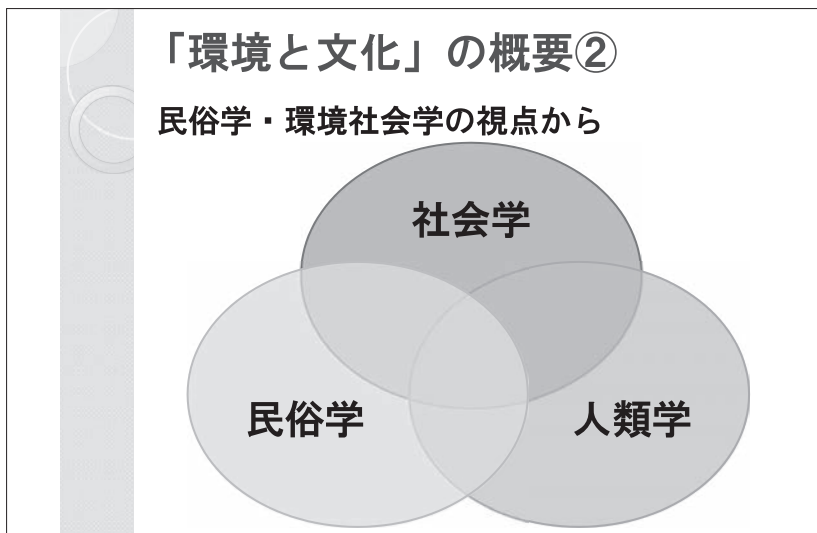
【スライド②-4】

「環境と文化」の概要①

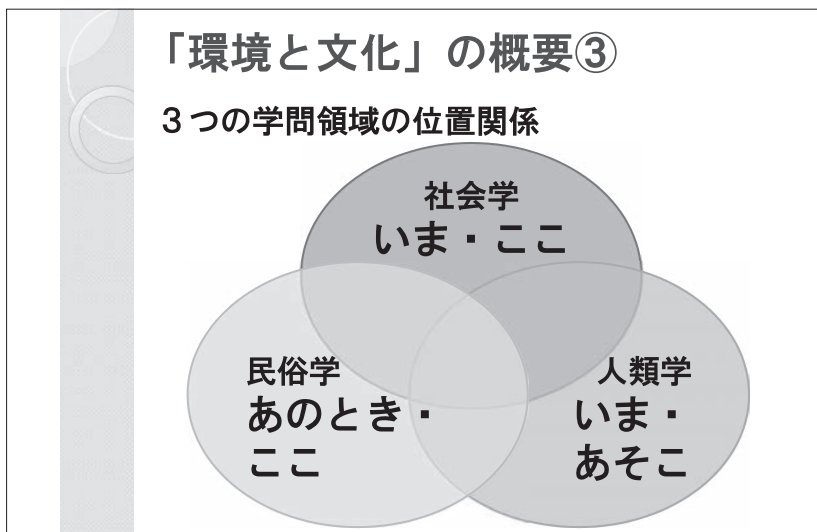
この講義では、環境問題を考える際に、**地域社会の生活の現場**で行なわれている／行なわれてきた**環境利用のあり方**を参照することで**解決策のヒント**を考えます。すなわち、**文化的なアプローチ**をとり、**環境問題**に取り組むことになります。

環境＝地域の自然環境・生活環境
文化＝生活文化・地域文化

【スライド②-5】



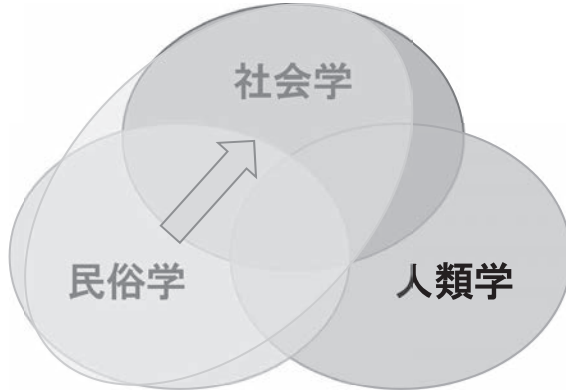
【スライド②-6】



【スライド②-7】

「環境と文化」の概要③

民俗学・環境社会学の視点から



【スライド②-8】

「環境と文化」の抱える課題①

課題①対象から生まれる距離感

講義で扱うのは、「ここ」＝日本社会のできごと。しかし、それは、受講者の多くが生きてきた「ここ」のできごとではない…。

自然環境と深くかかわってきた人たち＝地方のコミュニティ（農山漁村）をとりあげ、そこに生きる人びとの生活実践に学んでいく。

【スライド②-9】

「環境と文化」の抱える課題②

課題②方法から生まれる距離感

文化論アプローチは、「いま」から
＜共時的＞にアプローチするのでは
なく、「あのとき」から＜通時的＞
にアプローチする。

昔ばなしになりやすく、受講者に
とってなぜいま学ぶ必要があるのか
が見えにくくなりがち・・・

【スライド②-10】

「環境と文化」の抱える課題③

「今、社会を認識しようとするとき、
素直に受け入れられるのは自分を中心
とした身の回りの世界だけであつ
て、それを越えた社会の現実感がき
わめて薄れているのではないか」

【玉野2004:72】

➡ 時間軸・空間軸どちらも、
受講者の身の回りの世界から乖離
「とっつきにくい」側面がある

【スライド②-11】

映像視聴の前提①

日本財団（東京都港区）は、今年から4月4日を「養子の日」に制定。...日本では、乳児院などの施設で暮らす赤ちゃんの多さが国際的に際立っている。欧米などの海外では、望まない妊娠で生まれた赤ちゃんの多くは、里親に引き取られて、家庭環境で暮らせるしくみが整備されている。ところが、日本では里親が引き取ることはまれで、9割の赤ちゃんが乳児院に預けられているという。たとえ血のつながりはなくても、家庭の愛情をたっぷり受けてすくすく育てる子どもを増やす狙いだ。

【スライド②-12】

映像視聴の前提②



時事通信2017/03/09「子どもを救う特別養子・30年目の光と課題」より

【スライド②-13】

視聴するドキュメンタリー

朝日放送「この子のために」

2014年11月5日放送

BS朝日 ザ・ドキュメンタリー

「傑作選「密着!小さな命の物語」

2015年4月30日にて再放送

【スライド②-14】

視聴したからこそ展開できる議論

「産みの親」が育てられないことは、
いつの時代にも存在していたはず
では過去はどうだったのか...

➡ 資料1へ

➡ 擬制的親子関係や
日本の家・家族の特性

【スライド②-15】

なぜドキュメンタリーが有用なのか

「環境と文化」の文脈で言えば...

- ①農山漁村の課題や社会問題を描く作品が近年を多く作られている。空間軸の距離を埋めるツールに！
- ②ドキュメンタリーは「いま」起きている現実を映している。通時的にとらえてみると別の解釈も可能。文化論的アプローチの特性理解につながる！

【スライド②-16】

ドキュメンタリーの特性①

ドキュメンタリーは、映像表現のひとつの形式である。ドキュメンタリーは、documentという語源からも類推されるように、「出来事をありのままに映したノンフィクション」という意味合いが付与されている」〔丸山2013：135〕。

ただし、「映像資料が客観的であるというのは単なる神話にすぎない」〔稲村2012：16〕こともまた事実である。

ドキュメンタリーの特性②

「ドキュメンタリー映画は、現実性の極から創造性の極にわたる広い振幅」をもつ〔栗原2015：161〕。

ドキュメンタリーを「強いて定義づけるなら『何らかの現実をモチーフにした映像作品』ということになる」〔大澤2016：155〕

➡ そこに描かれた現実をもとに
多様な議論が展開可能

メディアと研究・教育の 健全な関係構築のために

「研究者の研究成果が最終的な記事や番組の作成に貢献している場合、その研究者の貢献を明示すること」を求める声明

「言うまでもありませんが、研究者もマスコミ報道から情報や着想やヒントを得た場合、その貢献を明示すべきです」

2017年12月21日「マスコミ報道等で研究成果を援用する際のクレジットの明示について」京都大学文学研究科・社会学専修

【スライド②-19】

引用文献

- 稲村務 2012「映像人類学の可能性ー比嘉政夫先生の撮った
1980年代のタイ・雲南・貴州」『地理歴史人類学論集』
(3)、pp.15-42
- 大澤一生 2016「ドキュメンタリーは、生きものの仕事」
『武蔵野大学武蔵野文学館紀要』(6)、pp.155-160
- 栗原詩子 2015「編集こそが映画であるような手法」『西
南学院大学国際文化論集』30(1)、pp.131-163
- 小林直毅 2011「大学教育における「水俣」のテレビド
キュメンタリー」『スピーチ・コミュニケーション
教育』(24)、pp.33-42
- 玉野和志 2004「魅力あるモノグラフを書くために」好井
裕明・三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』
世界思想社、pp.62-96
- 丸山友美 2013「ドキュメンタリーの＜偶然性＞」『マス
コミュニケーション研究』(83)、pp.135-152

第3部

舞台探訪の動画は 文学講義に資するか —志賀直哉『城の崎にて』鑑賞を中心に—

文学部 兼任講師
棕棒 哲也 氏

○**司会** 続きまして、棕棒哲也先生にお話を頂きたいと思います。棕棒先生は、本学文学部の兼任講師でいらっしゃいます。受賞された科目は、「文学講義331」サブタイトルは「近現代日本文学1」という科目です。研究されている分野といたしましては日本近代文学ですが、農民文学研究で学位を取得されており、近年では地方文学なども研究対象とされております。

本日は、「舞台探訪の動画は文学講義に資するか—志賀直哉『城の崎にて』鑑賞を中心に—」というタイトルでご報告を頂きます。棕棒先生、どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに

○**棕棒** ご紹介ありがとうございます。棕棒と申します。よろしくお願いいたします。「舞台探訪の動画は文学講義に資するか—志賀直哉『城の崎にて』鑑賞を中心に—」と題して、ご報告させていただきます。

報告の要旨は、授業の概要、舞台探訪までの試行過程、各回における工夫、動画視聴としております。動画そのものは、おそらく5分程度ご視聴いただくことになると思います。できれば各回における工夫に時間を割かせていただきたいと思います。【スライド③・1】

1.「文学講義331(近現代日本文学1)」という科目

まず、授業の概要を、目標、内容、定義の順でお話しします。目標は、近現代日本の主に文学を〈場所〉という観点から読むことで、さまざまな鑑賞の仕方について理解することでした。ここで「主に」と申し上げますのは、言語による表現活動を「文学」と捉えた上で、関係諸分野である映画や漫画、アニメなどを講義の範疇に入れたからです。

次に内容は、特定の場所を舞台とする作品を取り上げて構成いたしました。具体的な場所の情報を付け加えることで可能になる解釈、あるいは鑑賞といったものについて考察を深めようとしたわけです。

なお、舞台探訪の定義は、物語の行間を、背景を、あるいは実態を探るために、舞台を訪ね歩くこととしました。スライドの下部に、文学散歩でも聖地巡礼でもコンテンツ・ツーリズムでもない」と記載いたしましたが、これについては若干説明が必要になろうかと思います。

ご存知のように、文学散歩といえますのは野田宇太郎ほかが創始したものであり、太平洋戦争後において、文化破壊の防御あるいは反抗のために、また後代に向けて文学遺跡を伝承するために行われたものです。しかし、ここでいう舞台探訪は、そこまでのモチベーションを持って行ったものではありませんでした。そ



のため、「文学散歩」という言葉を掲げることに、二の足を踏んだわけです。

一方で、「聖地巡礼」という言葉が、漫画、アニメの舞台を訪ねる際によく使われます。聖地巡礼は、巡礼する際の同士の連帯でありますとか、あるいは、訪れた当地での心の通じ合いなど、そういったものが期待されるのですが、それは私の活動の範囲を超えるものでした。また、「コンテンツ・ツーリズム」と称する場合には、観光あるいは観光学をどうしても念頭に置くのですが、それも私の企図と異なります。そこで、なるべくニュートラルな言葉を探した結果、「舞台探訪」に落ち着いたわけです。【スライド③-2】

さて、冒頭でご紹介いただきました受賞は、授業評価アンケートがもとであり、今回の登壇の機会をいただいているわけですので、そのアンケートに対する学生の回答を集約したものを皆さんにお示ししたいと思います。【スライドを指し】赤字でお示ししたのが大事なところです。そして、下線を引いたところにご注目ください。結局私の講義において要となったものは、スライド、リアクションペーパー、それから舞台探訪としての動画と静止画であったように思います。

良い点と改善点を示させていただきました。改善点のBをご覧ください。「配布資料における割愛は再考を要する。特にまとめ部分。空欄を減らしたほうが集中できる。」云々とありますが、これについて説明させていただきます。配布したレジュメにおいては、わざと分かりやすく空欄を作りました。その空欄にどのような言葉が入るのか、学生の皆さんにお考えいただきながら、講義を進めたわけです。ただ、時にそれがかなり分量として過大になってしまって、それでやり過ぎではないかというコメントを頂いたわけです。

また、リアクションペーパーですが、行数や書式を指定するようにいたしました。賞を頂いた2016年度の講義においては、8行といたしました。ただ、近年はむしろ行数よりも書式を徹底していただくようにしています。ツールミンモデルを活用し、主張、理由、根拠などの役割から事細かに説明して、その上で書くようにと申し上げています。【スライド③-3】

Ⅱ. 舞台探訪までの試行過程

さて、舞台探訪までの試行過程についてもお話しすべきだと存じます。先ほどご紹介いただきましたとおり、農民文学研究で学位を頂戴したのですが、農民文

学研究をそのまま講義で取り上げるのは難しいだろうと考えました。農民文学者に例えば、伊藤永之介や和田伝、山田多賀市などがおりますけれども、会場の皆さまにおいてはご存知ない人名があるのではないかと思います。おそらく学生さんにおいては、なおさらそうであろうと考えました。そこで、「地方色の文学」を取り上げるというふうに、学生の皆さんに受け入れやすいように考察対象を少し変更しました。その上で講義を展開していきましたが、それでも反省点が出てきたわけです。

スライドの下線部にご注目ください。地方色の文学を扱うなかで、文学者がよその土地に取材し、そして作品を書く、そのときの^{よそのもの}他所者の視点を読み手である私たちも共有できないものかと考えたのです。もちろん実際に学生の皆さんを引率して、当の場所に行くなどということは現実的ではありません。ですから動画を用いて、あるいは静止画を用いて、作品の舞台にお連れするというのを考えなければいけなくなりました。舞台探訪の必要性は、私においては、読み手をその舞台に連れていくための方途の必要性として生じたものだと思います。【スライド③-4】

さて、舞台探訪において使用した機材についてもお話しすべきかと存じます。現在、アクションカム、ウェアラブルカメラというと、おそらくSONYの製品と、それからGoProのものが主流かと思いますが、私はSONYのHDR-AS200Vを選択いたしました。その理由は、SONYの製品に優れた手ぶれ補正の機能が付いているからです。このような感じで〔バックパップのショルダー部分に〕取り付けて撮影を行いますので、どうしても揺れてしまいます。後ほど見ていただく映像でも、やはり揺れている様子が分かります。もし、手ぶれ補正の機能がなければ、とても見づらい映像になったでしょう。なお、ジンバルという、ぶれ防止のための回転台もあるのでありますが、残念ながらSONYに対応したサードパーティーの製品は多くありません。

また撮影後は、動画管理ソフトによってビデオを編集あるいは変換するようにいたしました。それによって、撮影した期日や、経路などを示せるようになります。また、静止画については、かなり古いものですが、CanonのPowerShot S100を使うようにいたしました。一眼レフなどであればより精細な画像を撮れるのですが、旅先で持ち歩くものとしては、少し重くて大きいようです。【スライド③-5】

3. 各回における作品の取り上げ方の工夫

では、各回における工夫を申し上げたいと思います。幾つかの作品を取り上げたのですが、まず第1回においては、夏目漱石の『こころ』を取り扱いました。

以降は、地図をスクリーンで見えていただくとともに、お手元の資料もご覧下さい。さて高校の教科書に載っている『こころ』ですと、おおかたが『こころ』上中下篇のうち、下「先生と遺書」を取り上げています。この部分は、学生の皆さんにも馴染みがあり、一度は読んでいるはずです。そのため、「先生と遺書」の部分を取り上げました。なお、映写した地図は高校の副読本に載っているものですから、さらに学生さんに親しみやすいものであるはずです。

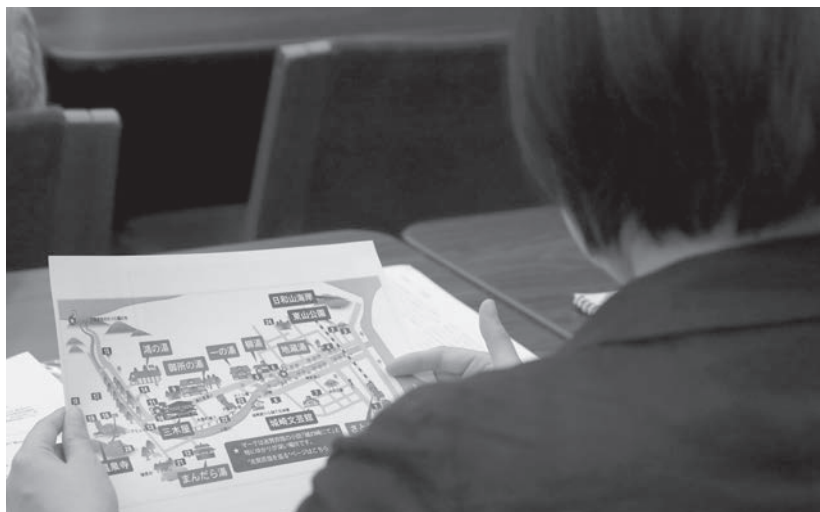
なお、[スクリーンの文京区小石川周辺の地図上の登場人物が歩いた道すじを指し]この青い道すじと赤い道すじのうち、後者の富坂の部分動画を学生の皆さんに紹介しました。ここは、実は少し傾斜のある坂になっています。その坂を下りていく、後々先生となる「私」が、後々妻となるお嬢さんとすれ違うというシーンが、ここを舞台に展開されるのです。なお、そのすれ違うシーンの前に、先生となる「私」が妻となるお嬢さんのお母さんに、「お嬢さんを私にください」と申し込む挿話が位置します。お母さんがお嬢さんにプロポーズの子細を伝える場に居合わせたくない「私」は外出します。ところが、その後にお嬢さんと偶然行



き会ってしまって、大変にばつが悪い思いで、坂を下りていく、そういうシーンの舞台であるわけです。その坂を動画でお見せすることによって、「私」が早足で歩いて行く様子とか、坂の効果はどのようなものかなどについて、学生の皆さんと考えてみたわけです。

次は、本日この後、動画を見ていただく『城の崎にて』の地図です。〔スクリーンの城崎温泉三木屋周辺の地図を指し〕星印とともに1、2、3と番号が振ってあります。『城の崎にて』は小動物の死を軸に展開する作品なのですが、1の場所で蜂の死、それから2で鼠^{ねずみ}の死、3で蝶螈^{いもり}の死が描かれます。なお、この地図は三木屋さんが作製された地図です。講義においては、三木屋さんの外観（☆1）、そして三木屋さんから、地図の真ん中を流れる小川、この大谿^{おおたに}川という川に架かっている橋（☆2）までの路程を映写いたしました。

今年の講義においては、さらに東山公園も取り上げています。なぜこの公園を取り上げるのかというと、本文をお配りしていますが、中ほどに、川や海の見える東山公園へ行くつもり「自分」が、川へ投げ込まれ殺されそうな鼠を見かけるが、しかし「自分は鼠の最期を見る気がしなかった」ためにその場を離れる、というシーンがあります。ここで、行くつもりでいた東山公園に着いたかどうか、それが書かれていません。なぜ書かれていないのだろうと注意を喚起しつつ、動画を見ていただくことにしています。



実は、東山公園に着くには踏切を越えなければなりません。そして、この作品において踏切を越えるということは特別な意味合いを持ちます。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、『城の崎にて』の冒頭は「山の手線の電車に跳ね飛ばされて怪我をした」と始まり、「背中の傷が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねない」と続きます。つまり、電車や線路、さらに踏切は死をイメージさせるものということになります。そのため、ここで踏切を渡らせるというのは、物語の中盤で死に関わりのある場所に主人公を接近させることになります。おそらく、そのような事態を避けたのではないのでしょうか。

後ほど動画で見ていただくとありますが、終盤に、☆3のマークが振ってある峠のほうへ登りながら踏切を越えるというシーンが出てきます。踏切を越える、つまり死に接近するという見せ場を後に据えるために、鼠の最期を見なかった後の「自分」の行動を伏せたのではないのでしょうか。以上のような解釈を、動画を交えて学生の皆さんにご理解いただくようにしています。【地図】

第4回から第6回においては、壺井栄の『二十四の瞳』を取り上げました。『二十四の瞳』は、昭和の初めに若い女の先生が岬の分教場に通うというシーンから始まります。その岬の分教場までの通勤ルートは、〔スクリーンの小豆島とその南東の地図上を指し〕竹生^{たけう}から湾沿いに進んで苗羽^{のうま}、古江^{ふるえ}、そして田浦^{たのうら}にある岬の分教場へ、というものです。この順路を現地でも撮影しました。その際には、カメラをバックパックのショルダー部分に取り付け、快適に走れるようにスポーツ自転車に乗って、そして撮影をしました。

講義においては、13キロメートルの道程を全て流すのではなく、ところどころ割愛しながら映写いたしました。そして舞台探訪の結果、分かったことは、まず道の一部が非常に急であること、自転車に慣れない当時の女性では通勤が難しいだろうということです。ここで立ち返って作品本文を見てみると、実は13キロのはずの道程が8キロに縮小されています。以上は、通勤が可能な距離を設けるという操作により、リアリティを担保したのではないかと、学生の皆さんにお話しいたしました。

第7回、第8回においては、『電源工事場』という伊藤永之介の作品を取り上げました。その舞台は、丸山ダムというところですが、ただ、2016年度の講義においては、当のダムの様子を撮れませんでしたので、代わりに、熊井啓監督の『黒部の太陽』という映画を見ていただきました。【スライド③-6】

さらに、第9回においては、「捕鯨文学」と題して、鯨の町・和歌山県太地町の様子を見ていただきました。ただ、この時にはまだ動画を撮っていませんでしたので、静止画でもって学生の皆さんに太地町についてお伝えいたしました。[スクリーンの和歌山県太地町の地図上を指し] くじらのモニュメントから始めて、くじらの博物館、くじら浜海水浴場、飛鳥神社、^{せきもん}岩門、漂流人記念碑、燈明崎というルートで静止画をお見せし、その合間にドキュメンタリー映画を見ていただきました。アメリカのアカデミー賞を受賞した『ザ・コーヴ』という映画がありますが、その一部、そして近年の『ビハインド・ザ・コーヴ』や『おクジラさまふたつの正義の物語』などといったドキュメンタリー映画の一部を見ていただきながら、太地町におけるさまざまな出来事に関心を持っていただくという形を取りました。

第10回には、『ドライブ・マイ・カー』という村上春樹さんの小説を取り上げました。少し端折りますが、第11回、第12回においては、京都文学、ことに『新釈 走れメロス』という森見登美彦さんの小説を取り上げました。また、第13回においては、マンガ・アニメの「^{あきみ}聖地巡礼」と題しまして、吉田秋生さんの『海街diary』ほかを取り上げました。【スライド③-7】



4. 動画で舞台探訪する

さて、では動画を2つご覧いただこうと思います。まず1つ目は、「山陰線の隧道」と題した動画です。

〔動画「山陰線の隧道」再生開始。適宜解説を挟みながら、早送りと再生を繰り返す。〕

県道に沿って歩いてゆく様子を学生の皆さんに見ていただきました。なお、動画管理ソフトを用いて、画面の上部に作品本文を付け加えています。

〔線路のシーンにさしかかり〕当然ながら、線路内には立ち入っておりません。トンネルがあるさま、線路があるさまを映し出しました。また川の音を学生の皆さんにお聞かせしたことも講義のポイントとなりました。といいますのも、先述の小動物たちの死が、川の流れと縁の深いものだからです。ですから、動画のみならず、音によっても学生の皆さんに鑑賞の手がかりをお示しできたのではないかと考えています。

〔動画「山陰線の隧道」再生終了〕

〔動画「蝶鰻の流れを探して」スクリーンに表示〕

2つ目の動画ですが、今回ポスター用の静止画としてお出ししたものがこの、「志賀直哉『城の崎にて』ゆかりの桑の木」です。今の桑の木は、3代目であるということです。なお、この桑の木に葉が付いていたことがなく、非常に困っています。なぜなら、『城の崎にて』には、風もなく桑の葉がヒラヒラと忙しく動くという印象的なシーンがあります。そのため、葉の付いた桑の木を撮りたいのですが、いまだ果たせていません。

また動画では見えませんが、この近くに看板があります。「直哉といもりの遭遇は、桑の木から少し歩いた流れの中で」と記されていますが、桑の木と「蝶鰻の流れ」は近接していません。そこで、この動画を学生の皆さんにお見せしながら、ご自分の蝶鰻の流れを見つけてください、考えてみてください、つまり二次創作的な試みをしてみてくださいと申し上げます。

〔再生開始。適宜解説を挟みながら、早送りと再生を繰り返す。〕

なお2016年度は非常に悪乗りをしまして、BGM(The Individualism of Gil Evansから“The Barbara Song”)を入れました。そして、要所要所で動画を止めて、蠼螋の流れはここであろうか、そこであろうかと、学生の皆さんにお考えいただくという試みをいたしました。【スライド③-8】

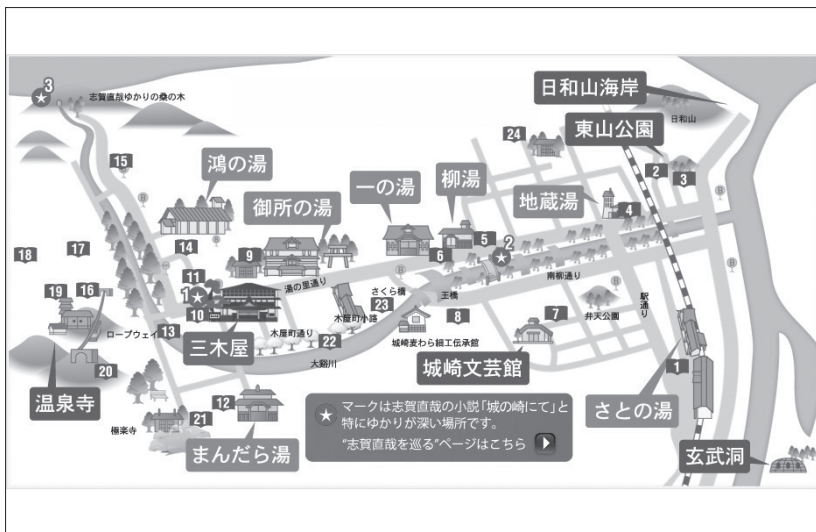
〔動画再生終了〕

5. さいごに

結局のところ、私の講義における動画の役割とは、聴講なさる皆さんを作品の世界へお連れすることであるように思います。それがどの程度効果を発揮したかどうかは、今のところまだ分かりません。当座は今期の授業評価アンケートの結果を待ちたいと考えております。以上で私のご報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○司会 棕棒先生、どうもありがとうございました。棕棒先生にとって、舞台探訪の動画を教材として使用する必然性のようなものを、お話を伺いながら実感することができました。

【地 図】



城崎温泉 三木屋 公式HPより

【スライド③-1】

シンポジウム「動画で深める学び—教材から授業を変える—」

2018/7/10@立教大学太刀川記念館

報告「舞台探訪の動画は文学講義に資するか —志賀直哉「城の崎にて」鑑賞を中心に—」

兼任講師 椋棒哲也

- 報告の要旨
- 一、授業の概要
- 二、舞台探訪までの試行過程
- 三、各回における工夫
- 四、動画視聴

【スライド③-2】

一、授業の概要

- 目標
近現代日本の(主に)文学を〈場所〉という観点から読むことで、さまざまな鑑賞の仕方について理解する。
- 定義
舞台探訪とは
物語の行間を・背景を・実態を探るために、舞台を訪ね歩くこと。
- 内容
特定の場所を舞台とする作品を取り上げる。具体的な場所の情報を付け加えることで可能になる解釈や鑑賞について考察を深める。

➤文学散歩でも聖地巡礼でもコンテンツ・ツーリズム研究でもない。

【スライド③-3】

参、「学生による授業評価アンケート」所見票

●良い点

- A) 映像・スライドが効果的である
- B) 広義の文学について考えることができる
- C) リアペに対してきちんと回答している
- D) 学校教材を新たな視点から読める
- E) 舞台探訪が面白い

▶スライド・リアクション・ペーパー・舞台探訪
(動画と静止画)

●改善点

- A) 出欠管理時に混雑している
- B) 配布資料における割愛は再考を要する *
特にまとめ部分 * 空欄を減らした方が集中できる⇨書かなくてはならず、集中力が保たれる
- C) 一作にかけける時間を増やすと良い
- D) リアペを書く時間が少ない
- E) 次回のリアペ課題を予告してはどうか
- F) 教室が狭く、座りにくい

【スライド③-4】

二、舞台探訪までの試行過程 —その必要性—

出発点…農民文学・地方(色の)文学

- ・ 地方色(特殊性)の⇨文学(普遍性)というジレンマ。

▶文学の第一義とは

- ・ 都会／地方の対比・そのステレオタイプ。
⇨都会の田舎・地方の都市という問題。
⇨東京の地方色という問題。
- ・ 他所者の視点が地方(色の)文学の鑑賞に有用である。
- ・ 地方(色の)文学に近づくための舞台探訪の必要性。
参、「文学散歩」「聖地巡礼」

【スライド③-5】

付、使用機材

- 動画

SONY アクションカム HDR-AS200VR(フルハイビジョン)

* バックパック／ハンドルバー マウントなど

* FEIYU TECH G4GS(ジンバル…手ブレ防止の回転台)



- 静止画

CANON POWER SHOT S100(1210万画素・5倍ズーム)

【スライド③-6】

三、各回における工夫(前半)

A) 夏目漱石「こころ」部分 * 上野など(本郷付近図)

Kと先生が歩いた経路。Kを出し抜いて求婚した先生がJと出会った場所。

B) 志賀直哉「城の崎にて」* 城崎温泉(三木屋地図)

山陰線の隧道
鼠の最期を見なかった後。桑の木の場面。蝾螈の流れはどこ？

C) 壺井栄「二十四の瞳」* 小豆島(とその南東)

蝾螈の流れを探して
片道半三キロ→八キロを自転車でかよう大石先生。二つの分教場。

D) 伊藤永之介「電源工事場」* ダム…「黒部の太陽」→八百津(町地図)

新しい明るい日本と「黒部の太陽」

【スライド③-7】

続、各回における工夫(後半)

- E) 吉村昭「鯨の絵巻」ほか * 太地(町ガイドマップ)…擬似舞台探訪…静止画
“THE COVE”/「BEHIND “THE COVE”」/ (「おクジラさま」)などの紹介
- F) 村上春樹「ドライビング・マイ・カー」* 南麻布(地図)
サーブ900オープンカーの運転
- G) 森見登美彦【新釈】「走れメロス」ほか * 鴨川など現代京都(逃走図)
京都を東から西へと駆ける本文に同行する
- H) 吉田秋生「海街DIARY」シリーズほか * 鎌倉など所謂聖地(周辺MAP)
鎌倉(マンガ)と聖蹟桜ヶ丘(アニメ)の聖地巡礼の試み

【スライド③-8】

四、動画視聴 —志賀直哉「城の崎にて」から—

山陰線の隧道



蝾螈の流れを探して



○**司会** これから質疑応答・ディスカッションの時間に移らせていただきたいと思います。どなたからでも結構ですので、フロアの皆さまから3名の先生方に、さまざまな形で質問を頂戴できれば幸いに存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

質問 1

○**舩谷** 観光学部、舩谷です。お話ありがとうございました。最初の反転の話と、後の2つだと、少し特質が違うのかなと思いますので、最初のお一方と、お二方で2つ質問したいのですが、まず平山先生に伺います。この反転授業の教材を作ろうという取り組みは、たぶん21世紀初頭ぐらいからずっとあったのですが、なかなか適当なソフトも見つからず、個人レベルで、要するにスライドと動画をシンクロさせた内容のものを作って、それを見せるという試みが定着しなかったように、私は学内にいて半ば思っています。最近ですと、例えばオープンキャンパスのときの授業を収録して、入学センターが作ったものがウェブに載っていたりはします。しかし、結局、平山先生はどういう形でこの反転の教材を作られたのか、先ほどちょっと見た感じでは、動画と教材をばらばらに作られているよう



にも見えました。メディアセンターのサポートも強調されましたけれども、ソフト提供であるとか、あるいは編集のサポートであるとか、どの部分を託したのか、その辺を少し教えていただきたいのですが。

○平山 反転授業をやる時点で、メディアセンターの方にはご相談に乗っていただいて、どのようなやり方がいいかと尋ねてお勧めいただいたのは、やはりメディアサイトでした。8号館の1階とか2階とか3階の5教室が空いている時間に行けば、いつでも収録ができるので、そこが一番いいかもということをご推薦いただいていた。ただ、私は自分の環境の中でいつでもできるという環境を作らなかったで、教室に行かなければいけない、時間も決めなければいけないというデメリットがありました。結局、自分のところでできる方策を、それはネットで調べたらすぐ出てきたので、QuickTime Player でやればいいということは分かりました。

なので、最終的にはBlackboardにどうやって載せるとか、さまざまことはメディアセンターの方に教えていただきましたけれども、動画を作ることに關しては、私がほぼネットで調べてやりました。私がそんなに苦労せずにできたので、そんなに難しいことではなかったのだらうと思っています。これでお答えになっ



ていますか。

○**舩谷** ありがとうございます。要するに、先ほど申し上げた、スライドと動画をシンクロさせるソフトを個人レベルにまで使わせるという状況には、本学としては今はまだないということです。

○**平山** その点に関しては、実は僕の身近にも、そういうシステムを1台持っているのです。10年ぐらい前に少し別の用途で大学に導入したシステムを持っているのですが、それはやはりビデオカメラを用意して動画とスライドと音声を収録するシステムです。ただ、それは少し大げさ過ぎるというのもあって、今回は私の顔は映さないと決めたので、音声とスライドの資料だけであれば誰でもできる、PCレベルの知識があればたぶんできることが分かったということです。最初から分かっていたわけではないのですけれど、少し調べたらすぐ分かったので、それでやりました。

○**舩谷** ありがとうございます。



質問2

○**舩谷** 続いて、お二方目、お三方目に伺いたいのですが、本学でも来年度100分授業が開始されるわけで、特に1年生ですけれども、50分授業に慣れている高校生が1年生になって、90分授業でさえ、あの状態ですから、100分になったらどのようなことになるのだろうか、なんとかしなければいけないと思っています。例えば、中間のあたりに映像を、先ほど映像を安易に使うなというお話もありましたけれども、使ってはどうかと少し考え始めています。しかし、1つ懸念されるのは、映像を流した後の立ち上がりというか、授業に戻していく、静寂性とはっきり言ってしまう方がいいのかもしれませんが、そこのところでの工夫とか、実際にどういう状況になるのだろうか。映像を映して、その後、また説明に移っていく切り替えのところがうまくいくのだろうかという点で、何かご経験、あるいはご意見があれば教えていただきたい。

○**金子** ご質問どうもありがとうございます。確かに映像を見せて、その後、講義に切り替わっていくわけですが、全員が全員聞いてくれていたらいのですが、睡眠学習の時間として使ってしまう人も必ずいるわけです。そのため、単純に映像を見せればいいというわけではないと思うのですが、工夫の余地はあ



と思います。

それは、これから見せる映像がどういう意図で見せているのか、したがって、その映像から何を考えてほしいのかをきちんと説明することです。その上で提示すると、ただ見るだけではなくて、頭を使いながら検討してくれるし、それぞれが違った考えを持ってくれるので、動画を見終わった後、「じゃあこの問題点に対して、この課題に対して、それぞれがどう考えたか」を問いかけることができますよね。そのようにしてから、また講義に戻ると、動画に対しても緊張感を持って見てくれますし、また講義に切り替えたときも、比較的ギャップがなく講義に入っていけるかなと思います。そのようなやり方を、授業内ではしているつもりです。

○**棕棒** ご質問ありがとうございます。もう金子先生がおっしゃるとおりです、と締め括りたいところですけど、私のほうでも少し申し上げます。まず私が学生の皆さんにご提示しているものが、編集、加工の拙い、素人による映像ですから、それを長々とお見せしたときに、むしろ映写している時間のほうが学生さんに寝られてしまうことがあります。一方で、非常に難しいことをお話しているという緊張感を持って、しかし話題の事柄がどんなに面白いことなのかを学生の



皆さんに、熱く語りかけてみると、意外と耳を傾けてくれることがあるようです。

ですから、映像を流した後の立ち上がりとしては、事前にその映像がどのようなものであるのかをお話することが必要である一方で、素人による映像である場合は、その映し方に気を付けることも重要だと思います。そしてまた、映写する前後で、それがいかに教員において、ひいては学生の皆さんにとって面白いことであるのかを、熱く語りかけることがとても重要になると思います。少し精神論めいているのですが、お答えになるでしょうか。

○**舩谷** ありがとうございます。

質問3

○**松下** 理学部の松下と申します。今日はどうも貴重なお話をありがとうございました。同じ理学部ということで、平山先生の反転授業に非常に興味があるのですけれども、授業を収録するときのテンションが自分は上がらないというお話が途中にあり、自分がやったときもそうかなと思って全体的に聞いていました。昨今、大学まで入ってくる学生、子どもたちというのは、結構スマホでの授業とか、予備校でも学習のときにリアルにface to face (フェースツーフェース) で



学ぶのではなくて、収録したビデオ教材で学ぶことが非常に多くなっていると思うのですね。その中で、反転授業というのは、チョイスとして、理学部だとわりと演習に重きを置く場合はありかなと思って聞いていましたが、作り手としてテンションを上げるには、実際にご経験になって、どうしたらいいかという、アドバイスを少し頂ければと思います。

○平山 私も最初のうちは、作った動画を毎回見直して、言い間違いが特にないか、致命的な間違いがないかは確認しました。やはりそれを聴くと、これはテンションが低いなとは、もう最初から気が付いていて、自分で聴いていて眠くなるのだから、学生は眠くなるだろうなと、そういう雰囲気はどうしても出てしまっています。それをなんとかしようという気持ちはあるのですが、どうしていいかは、私はいまだに分かっていません。学生が目の前にいると思ってしゃべればいいのかと思うのですけれど、どうにもやっぱりその雰囲気は出ないですね。

○松下 やはり作るときに、間違いがないように、正確さを期そうと思うと、若干しゃべりに守りが出てきて、テンション低めの感じにはなってしまう、そういう感じですか。

○平山 そういう意味での緊張感は少しありますね。学生を前にしてしゃべるのとは違う緊張感が少しあります。話していて、10秒前に言ったことが間違えていたと、時々気が付くことがあるので、それは完璧を目指そうと思えば、そこで1回止めて、少し戻してもう1回などとなるのですが、そういうのも言い直せばいいやと思ってしまっ

○松下 編集はしないということですよ。

○平山 編集は一切しませんでした。やっぱり動画の編集は、かなり大変なので。そこはやらないと決めて、後で間違いに気付いたら、来年、動画を撮り直すことに。

○松下 毎年動画を撮り直している感じですか。

○平山 1年目はもちろん新規に全部作ったのですが、2年目は楽できるかなと思いましたが、実はスライドの下に「2015年度物理計測論」と書いてしまい、これはまずいと思って、2016年度も全部収録し直しました。2017年度は、少し不満があるところもあったので、3分の1ぐらいの動画は収録し直して、今年の秋学期はたぶん一度も収録なしでいけるのではないかと考えています。だいたい完成に3年ぐらいです。

○松下 どうもありがとうございます。

質問4

○学外者 本日は貴重なお話、ありがとうございました。2点だけ質問させていただきます。まず1つは、金子先生に1つお伺いしたいのですが、ドキュメンタリー映像の作成につきまして、本学でも今検討を始めております。その中で、今回BS朝日さんの映像をお使いになられておりまして、そこでの著作権の問題をどのようにクリアしていたかを、まずお聞かせいただきたいと思います。あと、もう1つは、立教大学さんでの、そういった映像の作成に関しまして、コンプライアンスみたいな取り組みを何かされているのか、もし可能でしたらお聞かせいただければと思います。

○金子 著作権法については、私はそれほど詳しくないのですが、家庭用で視聴できるレコーダーで保存したものを教育で活用するのは問題ないことは確認していますので、そういった形で、一部だけを流しています。あと、多くの場合は、私は同世代に結構ドキュメンタリー映画を撮っていたり、あとメディアの中でそういう部門にいて作成したりしている人がいますので、そういう人から個人的にお借りしたり、あるいはご登壇いただいて、その人が作った映像を流しながら一緒に議論したり、そういうやり方をしています。あとは、教育用のDVDを購入して、ドキュメンタリー映画や映像を購入して、学生の皆さんに視聴してもらう、そういう方法も取っていたりします。大きくはその3つでしょうか。

○幡野 第1に、今回BS朝日の映像を授業や研究発表の場で使用したことにつきましては、結論として、著作権法上の問題は生じていないものと考えておりま

す。放送コンテンツ適正流通推進連絡会（以下、「放送コンテンツ連絡会」）という一般社団法人放送サービス高度化推進協会（A-PAB）の会員である放送事業者で構成され、テレビ番組に関する著作権の普及と違法流通への対応を行っている団体がございます。

放送コンテンツ連絡会のHPでは、「録画したテレビ番組を、学校の授業で上映してもよいですか？」という質問に対し、「学校の授業で利用するためであれば、録画したテレビ番組を上映することができます。」と返答しています（http://www.tv-copyright.jp/qa/qa_03_01.html 2018年8月23日確認）。

また、「テレビ番組の映像や静止画を研究発表の場で使用したいのですが、放送局に許諾を得る必要はありますか？」という質問に対して、次のように返答しています。

著作権法第32条第1項の適法な『引用』の範囲内であれば放送局に許諾をとる必要はないと考えられます。適法な『引用』の要件は以下のとおりです。

- ・ 公正な慣行に合致し、報道・批評・研究など引用の目的上、正当な範囲内で行われること
- ・ 主と従の関係があること（引用する部分が『従』）



- ・引用物には表記上明瞭な区別を設けること
- ・必要最小限であること
- ・出所(出典)は必ず明示すること(番組名、放送局名および放送日などを明示する)

以上を満たすことが条件です。条件に満たない場合は許諾を得る必要があります。

(http://www.tv-copyright.jp/qa/qa_03_03.html 2018年8月23日確認)

金子先生の授業および今回の研究発表につきましては、いずれも放送コンテンツ連絡会で示された基準を満たしていると考えております。

第2に、私の把握する範囲では、立教大学において映像作成に関するコンプライアンスの取り組みを特に行ってきたはおりません。今後、そういった取り組みを行う必要があるかどうかについて、大学教育開発・支援センターとしては注視して参りたいと考えております。

***著作権の問題に関するこの回答は、正確性を期すため、後日行った調査を反映した内容に更新。**



○平山 私は4年ぐらい前まで、メディアセンターの仕事についていました。当時の経験をお話しします。私がメディアセンターに関わっていた4年の間に、1つはiTunes Uに授業を載せることと、それからもう1つはJMOOC (ジェイムーク) に授業を載せることの2つの大きなイベントがありました。iTunes Uに載せる講義は、私の講義を載せたのですが、そのときにも、著作権とか、画面上の情報をどうするかとか、絵をどうするかという点は、さまざまな方にお話を伺って、やはり結論は出ないですね。

2つの考え方があるって、1つは著作権の許諾を全て得なければいけないという考え方と、きちんとクレジットを出せば問題ないという考え方があるようです。おそらく他大学さんでも同じだと思いますけれど、そこをどう切り分けるかは非常に難しいです。そのときは結果的に、iTunes Uの私が作ったスライドの資料には、例えば自分の論文とか他人の論文からのデータも載せていますが、そこにはきちんとクレジットを書くことで対応しました。JMOOCは、たしか当時は著作権処理をやったのですよね。JMOOCは、場合によってお金をかけたと思います。iTunes Uは一切お金はかかっていませんが、そういう意味での著作権処理はしていません。今のところ、一番きついパターンと、クレジットだけを出せばいいパターン、両方をやって今はオープンになっているのが現状です。

* JMOOC講座製作における著作権処理が大変だという各大学の意見を受け、ここ数年はJMOOC事務局の方でガイドラインを示し、著作権処理のサポートを行うようになっている。

質問5

○学生 本日はありがとうございます。本日は平山先生の反転授業のお話を伺いたくてまいりました。平山先生に質問ですが、配布された資料のほうで、「最後に」というスライドで、「科目によっては反転授業は非常に効果的」とあるのですが、先生は、どのような科目は反転授業が効果的だと考えていらっしゃるのでしょうか。私自身は、反転授業というのは、予習によって事前に知識を持つことで、授業でディスカッションとか考えを深められるところに利点があると思うのですが、講義形式のほうが適している授業もあるということかなと思ったのです。

が、どのような科目が反転授業に適しているとお考えでしょうか。

○平山 今おっしゃったとおりで、反転授業の理想形というか、私がやったのは決して一番いい方法ではないと思うのですが、予習をしてきた上で、あるいは本を読んできた上で、それをもとにグループでディスカッションをするなどというやり方がたぶん反転授業としてのかなりいい方法だと思っています。ただ、そこがやはり一番難しいのですね。たぶんグループディスカッションは、メンターをきちんと置くとか、学生をきちんと盛り上げるとか、そういうところが非常に難しく、ディスカッションが全く盛り上がらない反転授業はよく耳にします。

ディスカッションを盛り上げることが、たぶん私の能力として得意でない和前から思っていたので、なかなか私にとっては難しい。そのため、その点はもう諦めて、何せ問題を解けるようにする。授業の時間を、いわゆる物理の、数学にも近いのですけれど、いわゆる式に値を入れるなり何なりをして、自分の手を動かして解いた経験をするを、強制的にやる時間にするにしましたので、そういう意味ではディスカッションの時間はないです。

あるとすると、小テストをする前の半分、30～40分間は、別に演習問題を学生に配って、これは「周りと相談しながら解け」という時間になっています。そうすると、一部の学生は、3～4人で、ここがああだこう言いながら勉強をしています。ただ、それ以外の半分以上の学生は1人でコツコツやっているというパターンで、そういう意味ではディスカッションをここでやろうと思っても、うまくいかなかったのだらうなという気がしています。ディスカッションができればいいとは思っていますが、私自身はそこまでいくつもりは、今のところはない。

もう1つ、向いているかどうかですね。私は理学部の人間なので、理学部の演習という科目があるのですけれど、自分の手を動かす時間、いわゆる演習の時間を強制的に私の授業でやらせるという意味では非常に向いているなと思っています。

○学生 ありがとうございます。では、私は文系なので理系の演習とかはよく分からないのですが、平山先生はディスカッションで考えを深めるというよりも、強制的に問題を解く時間を取ることによって、成績なり満足度なりを上げることを目指しているということでしょうか。

○平山 ディスカッションで非常に役に立つと思うのは、多少分かっている人間が、多少分からない人間に教えるという、お互いにここが分からないということを行い合うことで、教えられる人間にも役に立つ一方、教える人間にも非常に役に立つ、そこがよいところと思っています。しかし、例えば私の授業の中では、放っておいてもそれをやってくれそうな学生は一部いますが、かなりの学生は、こっちが何かモーションを起こしてやらないと、そうはならないだろうと思っています。

したがって、ディスカッションはうまくいけば一番いいだろうなと思っているのですが、完璧を目指さないという意味での、そこよりはもっと楽な、強制的に問題を解かせるというやり方をする。物理の問題も、物理に限らないのですけれども、自分の手を動かして問題をたくさん解くと分かってくることがたくさんある、深まることがよくあるのですね。そのため、その最初の段階として、まずは自分の手で、自分で考えて解く経験をその場で作ってやるのが、講義時間中にやっている私の目的です。答えになっていますか。

○学生 分かりました。ありがとうございます。



質問6

○**学外者** 本日はどうも大変貴重なお話、ありがとうございました。動画を使うことによって非常に知識が深まるな、それから学問に対する興味が深まるなということで、私も今ぐらいに生まれていれば、こんな皆さんの授業が受けられて、もう少しいい学生になれたのではないかなと思います。

平山先生にご質問なのですが、反転授業なので動画を見てこないと本来は意味がないので、見てこいというモチベーションはどうやって与えているのか。例えば、「来週、最小自乗法の授業がある。反転授業だから、まずこの動画を見てこい。」みたいな、何かそんな工夫をされていますでしょうか。

○**平山** 特段の工夫はしているつもりはありません。ただ、毎回小テストをやって、この授業は40%が小テストの点数で60%が期末試験の成績評価にしています。小テストで点数を取らないと合格しないのですね。そのため、基本的には彼らは、小テストで点数を取らなければいけないという意識は持っています。したがって、それなりの数の学生は見ています。統計を全部取っているわけではありませんが、時々、どれぐらいの学生が動画を見てくるのかという統計を見ると、6～7割は見てきているようですね。

先ほどは省略しながら言いましたが、動画を見た回数と小テストの点数は、それなりに相関があって、かつ、複数回見ている学生というのは、ゼロはやはり低いのですが、1回見た学生よりも2回見た学生のほうが点数がいいのです。2回よりも3回、3回よりも4回見た学生が点数がだんだん上がるのですが、4回以上見た学生はあまり変わらないのですね。このような傾向が出ていて、だから見てきたら解けるという経験を一度すると、見てこなかったら解けないのだなと思ってきているのではないかなと思います。

したがって、ある意味、点数に直結する小テストをやるのが、彼らにとっては、「見ていかなきゃ」と思うモチベーションになっているのではないかなと思います。

○**学外者** 分かりました。ありがとうございます。私、特に物理の授業は、いかにこれが社会と結び付くのか、社会に出て役立つのかが分かるとうれしいなと思っていたのですね。たまたま今朝の新聞を見ると、日産自動車の排ガスの計測

の不正が記事だったので、まさにこの平山先生の授業、実験はきちんとやらなきゃいけないという技術者の倫理観を教える授業なので、そんなことを教えていただいたらうれしいななどと思いながら、平山先生の今日のプレゼンをお伺いしていました。

○平山 実は誤差論というのは、さまざまところで社会で関わっているのですが、学生は一切それを知らないですね。授業でも、あまりそういうところに結び付ける説明は、授業内に取り込むのはなかなか難しい。「物理計測論」では、10回を反転授業でやって、実は最初の2回は、なぜこの授業をやるのか、なぜこういうことを皆さんは知らなければいけないかという説明をします。そのために、私は原子力発電所からの放射能の話を絡めて、放射能は基本数字で測るもので、それをどうやって解釈するのかに、この誤差などをきちんと考えなければいけないという話をします。

一部の学生には非常に評判がいいですね。半分以上とは言いませんが、この講義を受けるモチベーションができたと言ってくれる学生は一部います。だから、「物理の学生はきちんと数字が読めなければいけないよ」という意味で、原発の放射能を例として、1コマ半ぐらい授業をやっています。



○**学外者** 分かりました。ありがとうございました。最小自乗法は、例えばアイスクリームの売り上げを予測するときによく使われる手法であったりしますよね。横軸を温度にして、縦軸を売上量にすると、だいたいこの線形で上がることはよくいわれているので、そのようなところから始めても面白いかななど思いました。平山先生の2枚目のスライドが非常に分かりやすく書いてあったので、私もぜひ平山先生の授業に潜って参加できればな、と思いました。また、最終的にこれはAIにもつながるから、いいのかなと思いました。本日はありがとうございました。

○**平山** 参考にさせていただきます。ありがとうございます。

○**司会** どうもありがとうございました。まだまだご質問は尽きないかと思いますが、ここで質疑応答の時間を終わりにさせていただきたいと思います。興味深いご質問、どうもありがとうございました。

I 閉会挨拶

○司会 最後に、当センターのセンター員である高林先生から、閉会のご挨拶をお願いしたいと思います。それでは、高林先生、お願いいたします。

○高林 本日は、お集まりいただきまして、どうもありがとうございます。そして、3名の先生方、平山先生、金子先生、棕棒先生もご報告ありがとうございました。感想めいたことを最後に少しだけ言わせていただきます。

当然、学修時間をどうやって増やすか、予習時間をどう確保するかといった、インプットとアウトプットをもっと増やしたいということは常に考えていることでございまして、平山先生のお話からはそういうことを勉強させていただいた次第です。

また、私は文学部で歴史をやっておりますので、金子先生のお話で、学生のほうから「昔のことでしょう」と言われてしまうということも、私も常にそういう経験があり、動画を私も使うことはありました。17世紀の火薬陰謀事件というイギリスの事件がありまして、カトリックがプロテスタントの議会全体を吹っ飛ばそうという陰謀だったのですが、BBCは、この事件について当時の火薬を再現して、実際に野原で吹き飛ばす実験をやるわけですね。そうすると、議会の建物が全部吹き飛ぶのですが、あらためてそのような光景を見ると、学生は「これは単なる陰謀ではなかったのだ」と思って少し距離を縮めたりするということも、私も経験をしました。

そして棕棒先生の、実際の現場に、どうやって舞台を実感させるかという問題に対する工夫も、実際に行か



大学教育開発・支援センター センター員、文学部
高林 陽展 氏

れているところが私は逆にすごいなと思いました。私などはGoogleマップで、舞台にあの人形を落として周りを見渡すことを、たまにどうしてもやってしまうことがあります。非常に手の入った、力の入った授業をつくっていらっしゃることに感銘を受けました。

改めまして、本日ご参加いただきました皆さま、そして3名の先生方、どうもありがとうございました。これで閉会とさせていただきます。〔拍手〕

○司会 どうもありがとうございました。本日お集まりいただきました先生方にとりましても、本日のシンポジウムの中に何かインスパイアするものがありましたら、当センターとしては大変うれしく思っております。改めて、大変貴重なご経験を披露してくださいました3名の先生方に拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。〔拍手〕



●大学教育開発研究シリーズ バックナンバー

- NO.1** 外から見た立教大学
—ミッションと社会的要請— (2006年)
- NO.2** 「学生による授業評価アンケート」にもとづくRIKKYO授業ハンドブック
—学生の積極的な学習を励ますために— (2006年)
- NO.3** 変化する高校生と大学への期待
—高校から見た立教大学— (2007年)
- NO.4** わが大学・わが学部の教育改革を語る
—学生の学ぶ力、選ぶ力とカリキュラム— (2007年)
- NO.5** 立教大学の初年次教育とその展開
—〈勉強〉から〈課題探求型学習〉への道— (2007年)
- NO.6** 学生が見た立教大学の初年次教育
—今後の充実に向けて— (2008年)
- NO.7** 立教大学の今後と中教審の審議
—学士課程教育の再検討と将来を考える— (2009年)
- NO.8** バージニア工科大学視察報告
—米国における先進的な教育改革の事例に学ぶ— (2009年)
- NO.9** 立教大学における学習支援と図書館 (2009年)
- NO.10** 立教大学におけるアドミッション・ポリシー (2010年)
- NO.11** アクティブな学びをデザインする
—4つの授業をめぐる対話— (2010年)
- NO.12** グローバル化に対応する大学教育の在り方
—東アジアの高等教育における質改善への取組に学ぶ— (2010年)
- NO.13** 大学生の社会的・職業的自立に向けた教養教育の在り方 (2011年)
- NO.14** アクティブな学びをデザインする vol.2
—学生の気づきを促す3つの対話— (2011年)
- NO.15** 学位取得へ導く大学院教育のあり方
—博士後期課程を中心として— (2012年)

NO.16 日本の大学に求められている国際通用力とは (2012年)

NO.17 学びが高まる学習環境とは
—ハード、ソフト、コミュニティ— (2013年)

NO.18 大学院研究指導への誘い^{いざな}
—海外マニュアルの紹介— (2013年)

NO.19 「読む」学生が育つ大学教育を求めて
—若者の読書実態と授業実践を始点として— (2013年)

NO.20 アクティブな学びをデザインする vol.3
—2学部における初年次演習科目の実践から— (2014年)

NO.21 アクティブな学びをデザインする vol.4
—学びの転換を促す「導入期」演習科目— (2014年)

NO.22 「学習成果」の設定と評価
—アカデミック・スキルの育成を手がかりに— (2015年)

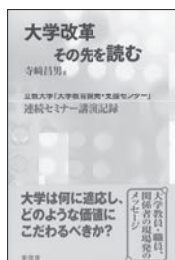
NO.23 海外大学における博士号取得
—立教大学教員の体験をきく— (2015年)

NO.24 アクティブな学びをデザインする vol.5
授業デザインとアクティブラーニング
—新任教員向けFDワークショップ開催記録— (2015年)

NO.25 大学院指導の組織とシーケンス
—立教の点検と展望から— (2016年)

NO.26 「育てる」アクティブ・ラーニング
—学生とつくる大規模授業— (2017年)

●連続セミナー講演記録



寺崎昌男『大学改革 その先を読む』(2007年)
東信堂 ¥1,300

編 集

山路 茜 (大学教育開発・支援センター 助教)

藤澤 広美 (大学教育開発・支援センター 助教)

大学教育開発研究シリーズ NO.27

動画で深める学び

—教材から授業を変える—

2018年10月発行

発 行

立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL : 03-3985-4624 FAX : 03-3985-4615

http : //www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html

e-mail : cdshe@rikkyo.ac.jp

制 作

株式会社アクセスリード

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-15-1 渋谷クロスタワー 24階

TEL : 03-5774-2330 FAX : 03-5774-2339



RIKKYO UNIVERSITY